The Sevens Key

零/Rey

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ　Ｓｅｖｅｎｓ　Ｋｅｙ

【Ｎコード】
Ｎ７９４７Ｗ

【作者名】
零／Ｒｅｙ

【あらすじ】
ウルは旅の途中でふと立ち寄った教会でとある絵画を目にする。その絵を熱心に見ていたウルの心境を聞こうとした仲間たちの目の前で、彼にかけられたヤドリギの呪いが発動し彼の左胸から白い光が仲間たちを覆い尽くし…
煉獄の世界をベースにウルと仲間たちのやり取りを書いた小説です。過去にコピー本として出した本の再掲です。

なお、元のゲームがガチホモ系と流血、ホラー要素等々でＣＥＲＯ

１５設定になっています。
なので、当然この小説もそういう描写の上にさらに上乗せしていろいろ設定して書いてあります。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ　：　Ｔｈｅ　ｃｈｕｒｃｈ（前書き）

元のゲームがガチホモ系と流血、ホラー要素等々でＣＥＲＯ１５設定になっています。
なので、当然この小説もそういう描写の上にさらに上乗せしていろいろ設定して書いているものです。

Prologue : The church

日の光がゆっくりと西に傾き、ステンドグラスに差し込む光に赤さが混じりつつあったルアンの教会で、彼女は神の前にひざまづき、頭を垂れて祈りをささげていた。一心不乱に十字架のイエス・キリスト像に祈りをささげる彼女はまるで聖母のような純粋さを感じさせるものだった。そんな彼女の周りをまとう空気は、おいそれと声をかけられる感じではなく，俺は、彼女が祈りを終えて、振り返って声をかけてくれるまで待つしかないな、と腹をくくった。そうと決めた以上、ただ単にその場でじっとしている、というのが性に合わない俺は、探検、とばかりに、彼女の邪魔をしないように音を潜めながら、教会内を移動して、ステンドグラスや飾ってある装飾品等をぐるりと見回していた。その中のひとつが妙に俺の気にかかった。教会、といえば、神に祈りをささげ、安らぎを求める場だというのに、それにはまったく似遣わない、といっていい絵が飾ってあったからだった。俺は、その絵をじっくりと見るべく、近寄った。そのまま絵に気を取られ、見とれている俺に、不意に背後から声をかけられた。

「どうしたの？えらくその絵を熱心に見ているけど・・・」

神への祈りが終わった彼女が、興味深げに俺とその絵を見比べていた。

「いや、この絵がさ・・・教会、という場所にはあまりにも似遣わない、という感じを受けてさ・・・教会といえば、神に近いところに行ける場所、って感じだろ？でも、この絵はそれとは程遠い題材じゃないかって思ったんだよな・・・」

俺は、思ったとおりの言葉をそのまま口に載せた。彼女は一瞬、きょとんとした表情を示した。それから、淡く微笑むと、俺に質問した。

「貴方、ひょっとして、教会なんて殆ど行ったことないの？」

その問いかけに、俺は大きく頷いた。俺にとっては、殆ど、どころか、このルアンの教会が初めて、だった。母親がロシア人のハーフで、顔つきと名前だけ見ると、西洋人とそんなに大差がない俺だが、幼少時代からずっと日本軍占領下の中国大陸で過ごし、教会というものを知る機会はかなり乏しかった。その上、子供のときに両親と死に別れ、ずっと一人で生きてきた俺は神自身、信じたくもないし、信用できるものでもない、という否定した認識が強かった。また、死後の世界を天国、地獄に振り分け、非合理的な基準で選ばれた人が天国に行ける、というある意味選民趣向に近い考え方を強制しているというのが俺の中で気に入らなかった。そんな思いがつい言葉として表現されてしまった。

「俺、思うんだけどさ・・・神ってある意味傲慢だよなあ・・・」

ぽつりとつぶやいた俺の言葉に彼女はどうして？という視線を投げかけた。神父の娘、としては明らかに神を否定する俺の言葉が引っかかったらしい。それに気がついた俺は、彼女の信仰心にケチをつけるような言葉をはいてしまった、という罪悪感からか、声に軽さを混ぜながら言った。

「だってさ、罪を犯した人は地獄行き決定、だぜ。人間なんて、誰でも大なり小なり罪を犯す生き物なのにそれはないんじゃない、って思ってさ」

「人間は罪を重ねて生きていくものだから、天国に行ける人、なんていうわけないじゃん、って考え方？」

彼女の言葉に俺は頭を縦に振って頷いた。孤児や弱者が生きるためにかっぱらいを繰り返すことが、正当防衛で相手を殺す羽目になったことが罪の蓄積となって地獄行きと脅すなら、自分からはなにもしてくれない、救済手段も与えてくれない存在のくせに、罪を犯すことなく清らかに生きろという神の言葉は、弱者は死ね、というのと同義語ではないか・・・俺の実体験から来た考えだが、そこまで彼女に伝えるのは言い過ぎのような気がして、俺はそれ以上口を開かなかった。しかし、彼女は、そんな不信心者の考えを否定する

ことなく、俺が見ている絵のほうに視線を向けていった。
「神はそこまで無慈悲でも厚かましい存在でもないわ・・・ウルはこの絵を見て、なんでこんな絵が教会にあるんだろう、って言ってたわよね・・・この絵は罪人に対する救済を表した絵よ」
「・・・これが？」
びっくりした表情で俺は彼女をまじまじと見詰めた。真剣な表情で絵を見つめている彼女の横顔からはその言葉が嘘、とはどうしても感じられなかった。俺の知る神に関するわずかな知識、それも聞きかじりに近いものと、彼女が信じるこの教会にいる神では、信仰の概念がまったく違うのだろうか・・・そう思いながら見つめる俺の視線に気がついたのか、彼女は俺のほうを振り返り言葉を続けた。
「生前罪を犯した人はこの絵に描かれている場所で7つの大罪、といわれるものを自力で浄化することによって神の許しを得、天国に自分の場所を得ることを許される、というわ・・・この絵は困難はあるけど、努力しだいで魂は救われる、というのを象徴した絵、とも言えるのよ」
彼女の話してくれた内容は、俺の持っている知識の中ではまったくない、初めて聞くものだった。でも、俺はその考え方を聞いて、少し神に対する認識を改めようかと思えるようになった。
「俺さ・・・神ってのは、すがるだけの対象で相手が慈悲の奇跡を起こしてくれるのを待つだけ、という受身だけの存在だと思っていたけど、アリスの言葉を聞いて考えがちょっと変わったかもしれない・・・」
「それは、神の言葉を民衆に伝える神父、という役割を手伝いしてきた私にとってとてもうれしいわ。貴方の中で、神は、どんな風に認識が変わったか教えてもらえたら、と思うのはだめかしら？」
彼女の言葉に俺は首を振ると、再び、その絵のほうに視線を向けていった。
「だってさ、自分でこじ開けてどうにかできる、なんて考え、すごく俺好みなんだよな。俺って、受身一方で他人がどうにかしてくれ

る・・・って考えは許容範囲外、だからさ・・・」
その言葉に彼女はくすくすと笑いながらこういった。
それって、すごく貴方らしいわ・・・だからこそ、今の貴方の強さ、というものがあるのね・・・

＋＋＋＋＋

なんで、いまさら、彼女と交わした言葉を鮮明に思い出したんだろう・・・
ウルは絵を見ながらふとそう思った。ニコルによってかけられたヤドリギの呪いは、時間をかけて確実にウルの心を蝕んでいた。忌々しい木はとめられない時間の中で彼の記憶をランダムに食いつぶし、ウルムナフ・ボルテ・ヒュウガという存在をも自分の成長の糧にしようといわんばかりに彼の心の中に根を張り巡らせていた。心の不調は身体にも反映し、慢性的な体調の悪さともなっていた。ヤドリギに対する抵抗の気力がなくなればそのまま心が壊されるのを感じる意識も持てず、そのまま寝たきりで生を終えてもおかしくない、そんな状態だったから、絵を見たときに、該当の記憶が瞬時にフラッシュバックで蘇ったことに彼は軽い驚きを覚えていた。これは、まだヤドリギの呪いに時間的余裕があるのか、それとも、場所が場所ゆえに、奇跡、と評されるものの作用なのか・・・そんな思いで彼は、じっと絵を見つめていた。

「ウルって、見かけによらず、信仰心の塊？」
　不意にかけられた言葉に、彼は後ろを振り返った。そこには、カレンが後ろに手を組んだまま立っていた。彼女はこの場所をぐるりと見回して、再び彼に視線を戻すと口を開いた。
「ふらりと立ち寄っただけのこの町で、教会を見つけた途端、率先として入っていったものね・・・貴方の背中の縦に割れた十字架をモチーフにしたジャケットの飾りをずっと見てたから無神論者、それよりも、神を嫌ってるかと思ってたわ・・・」
「・・・基本的には神を信じてるわけじゃないんだけどさ・・・この絵だけは妙に俺の中で印象が強くて・・・」
「ウルって、『神殺し』なんていわれているから、この絵の悪魔にでも親近感ある、とか？」
　カレンの問いに答えたウルに対して、アナスタシアがちゃかすように声をかけた。ウルは、よってきたアナスタシアの額に軽く指をはじかせ、いわゆるでこピンを彼女に与えながら反論した。
「俺自身、『神殺し』なんて一言も名乗ったことないぜ。やつらが勝手にそう呼んでいるだけでさ・・・迷惑極まりないんだけどよ」
「いったいわね！レディの顔に傷が付いたら責任どう取ってくれるの！」
　額を押さえ、むくれるアナスタシアに対し、ウルはからからと笑うと、教会のいすに座ってものめずらしそうにぐるりと見回している蔵人を指差していった。
「責任は俺の代わりに蔵人が取ってくれる、とさ。大体、お前らいつのまにやらちゃっかりと婚約者の仲だろうが」
「ちょ、ちょっと、ウルさんっ！」
「いやん、。ウルったら正直すぎ、照れくさいじゃないの」
　いきなり自分に話題を振られ、あわてて頬を赤らめ立ち上がった蔵人と両手で頬を押さえながら足でウルを突っつくアナスタシアを見て、ヨアヒムがぽそりとつぶやいた。
「いいな・・・俺もそういう相手が欲しいだっち・・・ウル、代わ

りになってくれないだっちか？」
「だ～か～ら～、何でお前はそこで、女じゃなくて俺を指名するんだっ！」
　ウルは脱力しそうになりながらも突っ込みだけはしっかりヨアヒムに入れた。ヨアヒムはいつの間にやら、ウルのそばによってくると、抱き寄せるように彼の腰を掴んでいった。
「だって、俺は女よりも男のほうが大好きだっち。ウルのこの肉体なんてもろ俺の好みだっち」
「・・・要するにホモ、ってわけね」
　カミングアウト宣言を堂々とするヨアヒムと、的確に突っ込みを入れるアナスタシアの凸凹コンビにウルのこぶしは怒りに震えていた。
「ええい、気色悪いまねするなっ！俺はノーマルだっ！」
　彼はその言葉とともに、ふっと沈み込むと、そのままこぶしを上に突き上げてアッパーカットをヨアヒムのあごに渾身の力で叩き込んだ。
　見事に吹っ飛ばされながらも、ウルの愛は痛いだっち～、という声を残して飛んでいくヨアヒムを横目で見ながら、ルチアがタロットカードを持って、ウルの前に現れた。
「なんならぁ～私がウルの恋愛運占ってあげてもいいわよぉ～私の占い、良く当たるんだからぁ～」
「結構、俺はアリス一筋だっ！」
　ちゃかしの入ったルチアの言葉に、マジで怒り顔のまま反論したウルをカレンはさびしそうにちらりと見て視線を床に落とした。そんな彼女のしぐさはウルの目には入ってなかった。
「・・・ひょっとして、おまえさんが教会、というのは、神父の娘であったアリスの影響かの？」
　そういいながらゼペットがウルのそばによって来た。ウルはその問いにこくりと頭を頷かせることで肯定の意思を示した。ゼペットは彼らが今まで見ていた絵をじっと見つめながら言った。

「一番目立つところにおわすキリスト像ではなく、わざわざ、この七つの大罪を表した、七人の悪魔がエリアに別れて住んでいる地獄絵を熱心に見ているお前さんの心境はどういうものなんじゃ？」

「どう・・・といわれても・・・俺は・・・」

ゼペットの言葉に答えようとしたウルの言葉が不意に止まった。彼は苦悩のうめき声とともに左胸を抑え、壁に寄りかかった。彼の重みで絵をとめてある金具が落ち、ガシャン、という音とともに絵が落下した。ウルもそれに引きずられるようにひざが落ち、絵の前でうずくまっていた。

「どうしたんじゃ、ウル」

「ウル、大丈夫？」

「ウルさんっ」

ウルの異変に気が付いた仲間たちが駆け寄り、彼に声をかけたが、彼はそれに答えることはまったく出来なかった。彼の表情は青ざめ、冷や汗が流れ落ち、左胸を掴むようにぎゅっと押さえていた。

「ぐっ・・・あっ・・・駄目・・・だっ・・・」

やっとのことで搾り出したウルの言葉に釣られるように、彼の左胸から白い光が閃光のように飛び出した。

「な・・・なにこれっ」

「きゃあああああっ・・・」

ウルの胸から放たれた光は、仲間たちの悲鳴を残してすべての風景を白く塗りつぶした。

Purgatory and pilot

「う・・・」

ウルは未だにずきずきと痛みを訴える左胸を押さえながらゆっくりと目を開け、身体を起こした。

「くそ忌々しい棒切れめ・・・なんで毎回毎回ろくでもないことばっかりしでかすんだよ・・・」

彼は悪態を自分の胸に突き刺さったヤドリギにつきながら顔を上げるとぐるりとあたりを見回した。

「あれ・・・？何処だよ、ここ・・・」

彼は当惑した表情でぼつりとつぶやいた。彼の目の前には赤茶色に荒れ果てた山に続く道と墓標のように点々と立っている枯れた樹木達があった。さっきまで居た教会とはまったく逆の、土地の赤茶色とくすんだグレーの雲の色しかない寂れたうすらさむい風景にウルは戸惑いながらも仲間たちの名を呼んだ。しかし、彼の呼びかけに答える者は誰もいなかった。

「グレイブヤードでもないみたいだし・・・ヤドリギのせいでまた変なところに飛ばされたのか？」

ウルはそうぼやきながら立ち上がると、腰に手を当てていった。

「ぐだぐだと悩んでいても仕方ないし、出口でも探すとするか・・・」

そういいながら、彼は山とは逆のほうを見た。しかし、彼の視線の先は、対岸が見えない深い切り立った崖によって行く手を阻まれており、このままでは到底越えることが不可能なのが明らかに見て取れた。

「こっちは駄目、ということは山を越えろ、ってことか・・・面倒くさいな・・・こうなったら、アモンにフュージョンして空飛んで山越えたほうが早いか・・・」

「それは無理です」

不意に彼の脳に別の声が響いた。その言葉の主を探すようにあわててウルは辺りを見回した。山に向かって続く枯れ木並木の先頭のほうにある木の陰に、フード付きの外套を被った人物が立っていた。

「・・・お前・・・さっきまでいなかったのに何処からわいてきた？それよりお前は何者だ？」

ウルは、警戒心を持ったまま、その人物と向き合った。人物は、彼が放つ殺気にも臆することなく、静かな、落ち着いた声で彼に話しかけた。

「ここは煉獄の世界・・・そして私は道先案内人、と言ったところかしら」

「道先案内人、という割には顔を見せない、というのは気にくわねえな」

ウルはそういいながら威嚇した。しかし、相手はまったくそれを気にすることなく、自分のフードに手をかけ、ゆっくりとはずしていった。そこに現れた顔にウルは驚愕の表情で凍りついた。

「・・・アリス・・・何故・・・」

フードをはずした下には、銀髪を結い上げ、穏やかな笑みをたたえた彼最愛の女性が立っていた。彼女はウルを見ると、彼に言い聞かせるように話しかけた。

「私の名はフェイスレス・・・そして、この姿は貴方の心の奥底で一番強い思いをもっている人物の姿を模したものです・・・」

アリスの姿が、模した偽りのものだと聞いた瞬間、ウルの表情に怒りの朱がさした。それを見た彼女は、ウルが何か言おうと口を開こうとしたのを制して話を続けた。

「私は決して、貴方の思いの強い人を愚弄するつもりでこの顔を模しているのではありません。フェイスレスという名前のとおり、私には私個人の顔、というものがありません。この煉獄の水先案内人として、ここを訪れた人間が一番信用して話を聞いて貰えるであろう姿をとっているだけです。この顔が気に入らないのなら、貴方の記憶のなかで思いが強い別の人の顔を取りますが？」

「・・・いい・・・そのままで・・・」
ウルは深いため息とともに彼女に言った。そして、彼は今まで話に出てきた単語で気になっていることを尋ねた。
「ここは煉獄だ、ということだが、いったいどういうことだ?ここは・・・教会に飾られていた絵の中の世界、とでも言うのか?」
「ええ・・・」
彼の質問に、アリスの姿をした水先案内人は肯定の言葉を発した。どうすればここから出られる、この世界にいるのは俺一人だけなのか、と矢継ぎ早に質問を飛ばすウルに彼女は苦笑しながら彼に落ち着くように、といわんばかりにあえてゆっくりとした口調で話し始めた。
「貴方の今尋ねた疑問を説明するために私がここにいるのです・・・ここは神が与えたもう試練の場ですが、試練をクリアするには説明がないとフェアとはいえないですからね・・・」
彼女の言葉を聞いて、ウルは思わず質問の声を上げた。
「ちょっとまて・・・俺が聞いた話では煉獄の試練は、死後、天国に行くために行われる、ってことだ・・・ということは、俺はもう死んでいるってことか?」
「いいえ・・・貴方はちゃんと生存しているわ・・・でも、この煉獄への扉の鍵を開いたのはあなた自身・・・」
彼女はウルの言葉を否定すると、思いがけないことを言った。
「俺は鍵なんて持ってないぞ」
思わず反論したウルに対して、彼女は彼の左胸を指差して言った。
「ここへ続く鍵、は姿形があるものではありません。貴方の願いと貴方自身が持つ特殊能力が鍵、となったのです・・・でも、ここにきた以上、どういう経緯があろうとも試練を受けてもらう必要性があります」
「ちょっと待て、冗談じゃないぞ」
彼女の言葉に、ウルは両手を広げ、あきれている、といわんばかりのオーバーアクションとともに批判がこもったような強い口調で

言った。
「なんで、強制的に試練を受けなければならない、となるんだ?受ける気はない、なら素直に出してくれるんじゃないのか?」
彼の言葉に彼女はゆっくりと首を振った。
「貴方が望んだのです・・・心に秘めた思いがあるからわざわざ教会に足を運んで煉獄の絵を見つめていたのでしょう?違いますか?」
彼女の言葉に図星を突かれたウルは反論を封じ込められ、沈黙でしか返せなかった。彼は、深いため息とともに、顔を上げると、彼女に問いかけた。
「ならば、その試練、とやら聞かせてもらおうか・・・俺はどうすればいい?」
彼女は、ウルの真紅の両目をじっと見ると、山を指差し、説明しだした。
「この山は七層に分かれ、それぞれが亜空間となって、広がっています。そして,その一層ごとに一人の悪魔が住んでいます。その悪魔がそれぞれ持つ、罪を表現した攻撃に対して、貴方の心の強さを証明できれば、納得した悪魔は散り、次の層に行ける鍵が現れます。貴方はすべての層の鍵を集め、最後の悪魔を散らせた後に現れる扉を開ければ現世に戻れる、というわけです」
「ふーん・・・要するに、俺は七人の悪魔とやらを倒せば言い、ってことだ」
説明したことをあっさりと一言で終わらせてしまうようなウルの発言に、彼女は苦笑しながら彼に言った。
「ただし、それを行うのは己の力のみ、ですから・・・貴方の特殊能力は使えません」
そういった瞬間、彼女の両手から金の粉が舞い散り、ウルの全身をまるで縛り付けるように覆った。あわててウルがそれを払いのけるよりも先に、金の粉は彼の中に吸収されていった
「な・・・なにしたんだよ、おい!」
得体の知れないことをされた、という警戒心から、彼はきつい目

で彼女をにらみつけた。彼女はそれを気にすることなく、彼に声をかけた。

「貴方の特殊能力を封じました・・・そして神の手助けはここまで、あとはあなた自身の戦い、となります」

「え・・・ちょ、ちょっと・・・」

ウルが声をかけようとした瞬間、彼女はすっとその場から霧散した。彼は深いため息とともに思わずぼやいた。

「フュージョン能力封じて、後はあなた自身が何とかしろ、って言われてもなあ・・・何処が神の使いの水先案内人、だ?」

あーもう、といわんばかりに頭をバリバリとかいたウルだったが、ふと重要なことを思い出した。

「あ~っ!あの野郎、俺の質問に答えずに逃げやがった!俺の仲間はどうなってるんだ!さっさと出てきて答えろよ!」

彼はフェイスレスと名乗った人物が消えた場所めがけて叫んだ。しかし、そこから再び人物が現れることはなく、彼の叫びが消えた後は静寂がこの場所を覆い尽くしているだけだった。ウルはこれからの道のりの長さを考えると、大きなため息しか出なかった。そして、そんな自分を奮い起こそうとして、自分の心に言い聞かせるように声に出してつぶやいた。

「大丈夫、だよな・・・ここにいるのは俺一人に決まっている・・・みんなは教会で、ひっくり返っている俺見て、苦笑いしながら仕方ないなあ・・・って言ってるはず、だ。絶対そうに違いない」

ウルはそういうと、煉獄の第一層の入り口だといわれた麓めがけて足を踏み出した。

The Wrath

山道をおよそ十分ほど上っていった時、不意にウルの周りの空間がゆがんだような気がした。あわてて立ち止まった彼の周りは、今までの赤茶げて草木も生えてない場所から、熱い溶岩の熱気を感じる洞窟へと変化していた。ウルはあわてて周りを見回したが、彼の背後と目の前は入り組んだ洞窟がまるで迷路のようになって彼の行き先を阻んでいた。

「どう・・・いうことだ・・・？いきなり洞窟の中に変化した、だなんて・・・」

思わずつぶやいたウルだったが、不意に彼は先ほどの説明を思い出した。悪魔は亜空間にいる、とフェイスレスは言っていた。となると、先ほどの空間がゆがんだ感じと、不意に変わった風景、これが亜空間に足を踏み入れた、という証拠ではないか、と。

「じゃあ、あとはこの層にいる悪魔を見つけてぶっ飛ばせばＯＫ，って訳だな」

彼は再び歩み始めた。不意に、彼の背後から自分への殺意を感じたウルは、反射的に振り返ると、その相手に対して回し蹴りをお見舞いした。

ガシャガシャ、と金属が混じった耳障りな音を立てながら相手は、洞窟の壁にぶつかり、壊れた。

「こいつ・・・どこかで見たことが・・・」

倒れている相手を見て、思わずウルはつぶやいた。壊れたかけらから類推して、元は、日本の武者の格好をしているようだった。赤茶げた物体をしばらく見ていたウルだったが、何処で見たのか、を思い出すことは出来なかった。

「ま、いっか・・・とりあえず先に進もう・・・」

彼はそういうと、素直に、目の前にある道を選んで歩いていった。彼が歩みを進めるたびに襲い掛かってくる落武者もどきを蹴散らし

ながら、洞窟をうろうろしていると、彼の目の前に、溶岩の川が目に入った。その川には、まるで橋のように、一本の岩の道が続いていた。

「やっぱり・・・見覚えがある、と思っていたら・・・ここは日本の不死山じゃねーか！」

彼は思わず叫んだ。彼の叔母である咲が遠見の力で、アスタロトに心を食われたニコルの居場所だ、と教えてくれた場所がここだった。何故、ここに飛ばされてしまったのか、ウルは首を傾げるしかなかった。

「とにかく・・・戻ることが出来ないなら先に進むしかねーな・・・そうしないと話が進まないことだしな・・・」

そういいながら彼は溶岩の熱気がむせ返る中、慎重に細い岩の橋を渡って行った。渡りきった先には、広場のような場所が彼を待っていた。ジャリ、という音が彼の足から聞こえた。彼はしゃがみこむと、地面に散らばっているかけらをひとつ拾った。

「水晶・・・そういえば・・・水晶の中にニコルの野郎は居たんだよな・・・」

無色透明であるはずの水晶は溶岩が冷えて出来た赤い岩の色と、彼の周りを流れる溶岩の赤さを拾って、赤く色づいているようだった。岩のくすんだ赤の中に、溶岩の鮮やかな赤い色がふっ、ふっと入り込む様はまるで自分の持っている水晶が血の固まりように見えた。

「・・・そういえば・・・ここは・・・加藤が大切にした人を亡くした場所、でもあるんだよな・・・」

日本軍に拉致されたニコルは、軍の実験により、理性を壊され、アスタロトと化した。その後始末をするべく、ウルの旧知の仲であった加藤と、その部下たちがここまでやってきた。別ルートで追ってきたウルたちは、襲い掛かってくるアスタロトを返り討ちにした。自分が契約を結んでいたアスタロトをウルたちに倒され、失意のままニコルはそこにいる全員に襲い掛かってきた、その時、部下の一

人であった桜花という女性が加藤をかばい、ここで命を落とした。加藤が大切に思っていた川島よし子中佐のクローンでもあった彼女をここで亡くした彼は、二度も自分の大切な人を失ったこと、となった。その後、横浜で川島よし子の墓の前でウルを呼び出し、その話をしたときの加藤の表情と伝わってくる感情は、ウルにはとてもじゃないが、他人事、とは思えなかった。

「ぐるるるる・・・」

ウルの回想を破るように、押し殺したような低いうなり声が広場の奥から聞こえ、そこから、ゆっくりと白い物体が姿を現した。その姿を見たウルはそれに走りよった。

「ブランカ、お前、こんなところにいてどうしたんだよ」

「ぐ・・・わおっ！」

ウルのかけた言葉に対し、ブランカは、威嚇の鳴き声で応酬した。ウルは、ブランカが、自分に対して明確な殺意を持っている、というのを感じ取ると、思わず、一歩、二歩と下がって距離をとった。

「どうしたんだよ、ブランカ！俺が判らない、っていうのか？」

ウルの質問に対して、ブランカは低いうなり声とともにゆっくりと歩き出した。不意に彼は跳躍すると、ウルに向かって襲い掛かってきた。

「やめろっ！ブランカ！俺だ、ウルだよっ！」

ウルは、ブランカの牙と爪の攻撃から身をかわしながら彼に向かって叫んだ。しかし、ブランカは再びウルめがけて飛び掛った。ウルはすんでの所でそれをかわしたが、爪が服にひっかかり、かすかな血と共に、服の破片が空に舞った。

「冗談じゃねーぞ・・・何で俺が相棒に攻撃されないとならねーんだよ・・・」

ウルは、思わず毒付いた。彼のぼやきに対し、ブランカは再び姿勢を低くして、うなり声を上げた。その姿は、ウルを敵と認識し、はっきりとした殺意を持っていた。その事実にウルの表情が硬くなった。その時、不意にウルの心に、ブランカの感情が流れ込んでき

た。大切なものを守りきれなかった、という憤怒の感情が・・・
「そうか・・・お前もジャンヌを守れなかったもんな・・・俺もアリスを守れなかったから同類だ・・・でも、そうだから、といってお前に攻撃されてここで命を落とすわけにはいかないんだ」
そういうと、ウルは覚悟を決めたように懐から愛用のクローを取り出し、拳にはめた。そんな彼の決意をあざ笑うように四方から声が聞こえた。
ーーーー大事なものを守れなかった・・・自分のふがいなさに怒りを覚えろ・・・殺したやつに対して怒れ・・・そして、すべてに怒りをぶつけろ・・・
それに呼応するようにブランカが踊りかかった。鋭い彼の攻撃によけ切れなかったウルの左手から一筋血が流れた。ウルは、痛みに顔をしかめながら、未だに響く声に向かって叫んだ。
「冗談じゃねーぞ!てめーらがガチャガチャいってブランカを操るなんてふざけたまねしやがって・・・てめーらの本体は何処だよ!」
しかし、それに答える声はなかった。尚もうなり声と共に襲い掛かるブランカをよけながらウルは妙なことに気が付いた。
「なるほどな・・・俺としたことが・・・早くにこれに気付けばこんな怪我しなくて済んだんだよ!」
彼はそういうと、飛び掛ってきたブランカとカウンターになるように拳を叩き込んだ。パリン、という澄んだ音と共にブランカの姿は掻き消え、彼の周りをきらきらと水晶のかけらが舞った。その瞬間、パリパリと空間にヒビが入り、きらきらとした透明な破片が彼の周りを舞った。あわてて目を覆った彼が、改めてゆっくりと目を開けると、そこは、石畳のフロアだった。そして彼の目の前には、鉄製の鍵が落ちていた。
「これが・・・このフロアを抜ける鍵・・・」
不意に、彼の目の前に、アリスの顔を持つフェイスレスが現れ、声をかけた。
「その鍵を拾って、貴方の目の前にある扉を開ければ次の層へ進め

ます・・・それより、よくこの場所を守る悪魔を倒せましたね・・・」

ウルは怒りに震えながらフェイスレスに毒付いた。

「てめえ、なんてことしやがる！仲間の姿を模して俺に襲い掛かるなんてこと・・・俺に襲い掛かってくるブランカに影がない、ってのと、白い毛並みの奥から赤い光が漏れている、ってのに気が付かなかったらやばかったところだぞ！」

「これも試練、です・・・相手は悪魔ですから、当然貴方の弱点を突くようなことをしてきます・・・」

相手の批判なぞ何処吹く風、といわんばかりに淡々と会話するフェイスレスにウルはもっていく怒りのやり場がなく、つい、床をけりつけた。相手が石畳だけに、ウルの足に痛みを残したが、彼はそれを気にすることなく、鍵を拾い上げ、彼女の横を無視するように通り過ぎようとした。

「お待ちなさい」

彼女の言葉に、ウルは不機嫌が思いっきり顔に出たまま振り返った。彼女の傍らには、いつの間にやらブランカが座り、じっとウルを見つめていた。また悪魔か、と警戒して見つめるウルの視線に気が付いたフェイスレスは、ブランカの頭をなでながら彼に言った。

「大丈夫です、彼は正真正銘のブランカです。もうひとつ、貴方に言っておきます。悪魔は貴方の仲間に関係するいろいろなものに姿を変え、襲い掛かってきます。そして、悪魔を一体倒すごとに仲間を一人救える、というわけです」

「・・・仲間が人質ってわけか・・・やっぱり神ってのはろくでもないな・・・」

思わず批判の言葉を漏らしたウルに対し、アリスの顔をした彼女は、かつてウルの記憶にあるアリスのように、穏やかな口調でたしなめた。

「それは違います・・・七つの大罪の中で、自分の過去と一番強く関係している大罪を表す悪魔のところにそれぞれの仲間がいます・・

・貴方が悪魔を退けることによって、仲間の罪も浄化できるのです」
そういいながら、彼女はブランカの頭をなでつづけていた。ブランカ、といえば、その状態にまったく警戒心を出すことなくされるがままになっていた。ブランカがなついているように見える今の状態に、ウルは複雑な表情を見せた。なまじっか、相手が恋人のアリスの姿を持ち、自分の相棒ブランカがおとなしいため、自分だけ仲間はずれ、になった気分を感じたことに気が付いたウルはあわててその考えを否定するように首を振った。フェイスレスは、そんなウルの心境に気が付いてないのか、あえて見ないふりをしているのか、表情を崩すことなく、再び話を続けた。
「この層を守っていた悪魔があらわす大罪は『憤怒』・・・だからこそ、ブランカがここにいるのです・・・」
ウルは深いため息と共に納得したようにいった。
「・・・なるほど・・・な・・・大切なものを守れなかった怒り＝憤怒ってわけか・・・ブランカも・・・俺もそうだもんな・・・」
「わお・・・ん・・・」
その時、なにも言わなかったブランカがウルの言葉に同意するように鳴いた。その瞬間、彼の姿はその場から掻き消えた。
「おい、ブランカ」
あわてて今までブランカがいた場所に手を伸ばしたウルに対し、彼女は自分の手をウルの手に重ねた。
「貴方がこの層の悪魔を散らしたことにより、ブランカは呪縛がとけ無事この煉獄から出ることが出来ました。だから心配しなくて大丈夫です」
そういう彼女の言葉に疑いの目を向けるウルに対して、フェイスレスは真剣な表情で彼を見つめていった。
「私はこれでも神の使い、の端くれです。嘘はつきません」
まるでアリス自身にそういわれているような気がして、ウルは思わず、わかったよ、信用する、と彼女に向かっていった。それを聞いた彼女はにっこりと笑うと、一言彼に声をかけてその場から消え

た。
「健闘を祈ります」、と。
「・・・はあ・・・やっぱり神って身勝手だよな・・・」
この先を考えると気が重くなったウルは思わずそうぼやいた。そして、彼は手にした鉄の鍵を使って目の前にある次の層へと続くドアを開けようとした。
「あれ?鍵穴がないぞ?どうやってあけたらいいんだ?」
ウルはそういいながら扉にもたれかかった。その瞬間、ギイ・・・、という重い音と共に扉が開いた。
「・・・ここで使わないなら何処でこの鍵使うんだよ・・・」
彼は自分の手の中にある鍵をまじまじと見てつぶやいた。そして、まいっか、と自分に言い聞かせると、腰につけているポーチにその鍵をしまった。そして、彼は次の層へ続く扉の奥に入っていった。

The Sloth

扉を開けた先は、荒れ果てた洋風建築の建物だった。ほこりにまみれてくすんだ色合いの建物の内装は、所々、木が腐り落ち、穴が開いてたり、ささくれ立ってたりしていた。その風景を見ながら、ウルはデジャヴを感じて小首をかしげた。

「・・・この建物も・・・見覚えがあるような・・・」

そのとき、彼の耳に、カサカサ、という何かをこするような音が聞こえた。この音には、ウルは聞き覚えがあった。

「この音は・・・バクスが這い回る音か！」

生理的嫌悪のこもった声で叫んだ瞬間、彼の言葉が正解、といわんばかりに黒光りしてテカテカした巨大な虫達が飛び掛ってきた。

「うえぇ・・・気持ち悪りぃ～～」

ウルは顔を引きつらせながらも的確に自分のクローでバクスを叩き潰していた。しかし、相手は、一匹出たらその百倍はいる、といわれるぐらい大量発生する生き物だけに、叩いても叩いても一向に減る様子はなかった。埒が明かない、と判断したウルは、バクスを蹴散らしながら建物の奥へと進む扉めがけて走りだした。

もともと廃屋だけに、扉はウルが走ってきた勢いのまま扉を開けようとノブを持った瞬間、バキッと脆くも壊れてしまった。

「やっべー・・・ま、誰もいないからいいよな・・・」

ウルはそう自分に言い聞かせながら、壊れた扉の残骸を横にのけ、そのまま奥に入った。数歩歩いたところに、小柄な人影と、二つに光る目が見えた瞬間、ウルはぎくり、と身体をこわばらせた。廃屋で人の気配は今までずっと感じることはなかったのに、ここにきて誰かが現れたのか、とウルは警戒しながらゆっくりと人影の場所へと歩いていった。

「くっそー脅かしやがって・・・人形じゃねえかよ」

相手を確認した瞬間、ウルは張り詰めていた息を大きく吐いて思

わず愚痴った。彼の目の前には、人間用の椅子に座った、子供くらいの大きさの、カールした金髪に、ガラス球の青い目をしたレースをふんだんに使ったドレスを纏った人形が座っていた。建物は朽ち果てて埃まみれなのに、この人形は出来てすぐ置いた、といっても過言ではないくらい綺麗な状態を保っていた。

「ぶ・・・不気味だな・・・」

思わずつぶやいたウルに、彼の目の前に座っていた人形が、唇の端を吊り上げて笑った。

「ヨウコソ・・・アナタハドンナニンギョウヲオノゾミデスカ・・・？」

「なっ・・・！」

ウルは目の前の人形が口をきいた、という事実に再び顔に緊張をよぎらせ、愛用のクローの切っ先を人形に向けた。しかし、人形は、ウルが示す攻撃的態度を一切気にすることなく再び口を開いた。

「アナタノタイセツナヒトノタマシイガコモッタニンギョウヲキボウスルナラ・・・コウボウヘドウゾ・・・」

人形は言うことだけ言うと、そのまま沈黙を保った。

「・・・いわゆるメッセンジャー、ってやつか・・・？しかし・・・工房って何処にあるんだよ・・・」

ウルはゆっくりと辺りを見回した。暗闇に慣れた目に、部屋のあちこちに置いてある人形が目に入った。しかし、ここにおいてあるものはすべて完成品に見えた。ウルは他の通路に続く扉を探して、部屋を歩き回った。そんな彼の耳に、カサカサ・・・という先ほど聞いた嫌な音が耳に入った。

「ぐえ・・・またかよ・・・ちんたらしている余裕はなさそうだ・・・」

ブーンという羽音と共に飛び掛ってきたバクスをかかと落としの要領でウルはけり落とすと、右手に見えていたドアを蹴破った。上に登る階段と下に降る階段を見たウルは、どこかで見た記憶があるような気がした。どうも気になる、と感じたウルは自分の記憶を手

繰り寄せた。
「あ～～っ！思い出した・・・ここってゼペットの爺さんに付き合わされた人形の館じゃねーか」
ゼペットに付き合わされて、彼がかわいがって所有しているコーネリアを作った、といわれている人形師が住んでいるこの場所につれてこられたことがあった。確か、彼は地下室にいたはず・・・
そこまで思い出した瞬間、彼は地下へ下りる階段を選択して再び走り出した。地下室の扉には、暗号式の鍵がかかっていたが、それはなぜかすでに開いている状態だった。
「こうなったら・・・あたって砕けろ、だな・・・ここの鍵が開いているってことは、ここに何かある、ってことだしな・・・」
ウルは一呼吸置くと、そのまま勢いよく扉を開けた。ランプの頼りない明かりだけがともされた薄暗い地下室はかび臭い空気を運んできた。そのにおいに顔をしかめながらウルはゆっくりとした歩みで奥へと進んでいった。
ぎぃ・・・ぎぃ・・・と軋む音がするほうに顔を向けると、揺らせる安楽椅子の上に人影があった。ウルはそこに向かってゆっくりと歩いていった。彼の目の前に人形を抱えた老人が椅子を揺らしているのが目に入った。
「おい、何でこんなところにいるんだよ、じいさん」
ウルは老人の肩を揺さぶった。されたほうの相手は、今まで閉じていた目をゆっくりと開いた。普段の好々爺、とも言えるまなざしと違い、冷たさと冷酷さを感じる老人の視線は、ウルをチラッと見た後、自分の抱えている人形を操りながら話しかけた。
「コーネリアや・・・余計なことを知らせに来たおせっかいがまた来たよ・・・知らなければ幸せなことはいっぱいあると言うのにのお・・・」
そう人形にいとおしむように話しかけた老人の言葉を聞いて、ウルの表情が凍りついた。ウルがこの老人、ゼペットと知り合うきっかけとなったのが、皮肉にも、アリスの訃報を知らせにいったたこ

とからだった。彼女が亡くなる前、一緒に乗った電車の中の話題で、これから行く自分の母親の墓が眠る土地に、唯一の親戚とも言えるおじが住んでいる、と教えられた。母親の墓参りが終わったら、そのおじに、ウルのこと紹介する、といわれ、その場所を教えてもらった。二人で会いに行ったら父親代わりを自負する彼がどんな顔するかしら、とくすくす笑っていた彼女が数時間後、自分の呪いを肩代わりする形で天に召されていく、とはその時思いもよらなかった。

――――・・・知らなければ幸せなことはいっぱいある・・・だからなにも考えるな・・・そのまま眠りに身を任せろ・・・

不意に、何処からか、彼にそう話しかける声があった。それを聞いた瞬間、ウルは思わず叫んだ。

「違う！知らなければ幸せなことなんて何一つありはしないっ！俺が知らなかったから・・・アリスが何か隠している風なのを知ろうとしなかったから・・・彼女は死んでしまったんだ！」

「ならば・・・お前さんには消えてもらうしかないのう・・・コーネリアと二人、楽しく余生を過ごしたいからのう・・・」

ゼペットはそういうと、コーネリアを抱いたまま立ち上がり、彼女を操作するトワインを手に持った。

「爺さんまで・・・操られているのか・・・それともこの爺さんも悪魔のもたらす幻影か・・・」

ウルは当惑したままつぶやいた。そんな彼の動揺に付込むようにコーネリアが飛び掛ってきた。木製の硬い腕がウルめがけて振り回され、彼の身体にあざを作った。ウルは数歩下がって糸の操作範囲外に逃れると、そのままダッシュで動かしている本体であるゼペットに向かって走りより、腕を払って弾き飛ばした。小柄なゼペットの身体はそのまま後方に吹っ飛び、壁にぶち当たった。

ドン、という鈍い音がウルの耳に飛び込んできた。この音はどう考えても肉体が壁にぶち当たった音だった。

「まさか・・・爺さんは幻ではなく本物・・・？じゃあ・・・悪魔はいったいどれを叩けば・・・」

仲間に傷をつけるような真似をした、という動揺からそのまま動きが止まったウルに対して、ゼペットは、よっこらせ、と立ち上がると、コーネリアを操り暁光の天使のドレスを着せると、ウルに光属性の魔法を放った。

「ぐっ・・・」

自分の持つ属性とは正反対の属性を持つ光の矢はウルの体中を鋭いナイフのように突き刺し、強力なダメージを与えた。思わずウルは苦痛の声を漏らした。ダメージでふらつく身体を支えながらウルは相手を見た。動きが鈍った敵に止めを刺そう、といわんばかりに再び魔法を放とうとするゼペットとコーネリアを見たウルの脳裏に、不意に先ほど出会った人形の言葉が蘇った。

――――魂のこもった人形を求めるなら工房へ・・・

「爺さん・・・恨みっこなしだぜ！」

ウルは愛用のクローを握り締めると、気力を振り絞り、ダッシュでゼペットの隣に立ったコーネリアの左胸向かってクローの切っ先を突き刺した。ゼペットが回避する間もなく、クローの先は、深々とコーネリアの左胸に突き刺さった。そこから、ピシピシとひびが入り、コーネリアの身体は粉々に砕け散った。その破片が部屋中に舞い散り、ウルめがけて襲い掛かってきた。彼はあわてて破片から顔を覆い、ガードする姿勢をとった。

「・・・え？」

自分の身体に無数に突き刺さり、苦痛を呼ぶと思った破片の感触がまったく感じられない、ということに気が付いたウルは、意外な表情でガードをはずし、顔を上げた。そこは、先ほどまでいた人形の館ではなく、前の層でブランカとフェイスレスが現れた石畳の部屋そっくりの場所だった。そして、中央にゼペットが倒れ付していた。

「おい、爺さん、大丈夫か？」

ウルはあわてて駆け寄ると、ゼペットの身体を起こした。その声に誘われるようにうめき声を上げながらゼペットは意識を取り戻し、

ウルを見つめた。
「ウルか・・・ここはいったい・・・」
「ん・・・どういったらいいのかな?煉獄の世界らしいよ。俺も良くわかってないけど」
ウルは、彼に心配をかけさせまいとあっけらかんとした表情で言った。ゼペットはしばらく頭を押さえていたが、深いため息とともに言った。
「わしは・・・しばらく夢を見ていたようじゃ・・・コーネリアと二人、なにも考えることなく、楽しく過ごしているという・・・な・・・わしが、お前たちのことを考えようとしたら、それを見抜くように、無理して知ろうとするより知らないほうが幸せだ、私と一緒にいたほうがずっと楽しいでしょ、とコーネリアが告げるんじゃ・・・」
彼の言葉にウルは静かに目を伏せた。そんな彼の気持ちを読み取ったかのように、ゼペットは再び口を開いた。
「知らないほうが幸せ、なんてただの逃げ、じゃ・・・わしはそうやって知らない振りをして逃げてしまったから・・・コーネリアの最後を見とれなかったんじゃ・・・彼女の最後の願いすら聞けなかった・・・」
「爺さん・・・」
ウルが話しかけようとした途端、ゼペットの身体がふっとかき消え、彼のいた場所に金色に光る鍵が残されていた。ウルはそれを拾うと、ウエストポーチに入れ、立ち上がると次へと進む扉をゆっくりと押した。

The Pride

扉を開けた先は、先ほどまでとはうって変わって、明るいきらびやかな場所だった。床には毛並みの良い高級なじゅうたんが敷き詰めてあり、廊下の所々にアクセントのように置いてある調度品も素人目にも明らかにわかる高価なものばかりだった。また、それぞれの部屋に続く扉のノブは金色に光り、金色のシャンデリアが煌々とした明るさを呼んでいた。

「ここは・・・」

この風景もウルには見覚えがあった。自分の胸にヤドリギを突き刺すよう命令を下したサビエンティス・グラディオの親玉であるラスプーチンが根城にしていた、ロシア皇帝の住居であるロマノフ宮殿だった。

「ということは・・・ここにいるのはアナスタシア、の可能性が高いな・・・しかし、今度の悪魔はどういう形態をとってるんだ?」

ウルは独り言をつぶやきながら階段を登っていき、彼女の部屋に向かって歩いていった。彼女の部屋の扉を軽くノックしたが、返事は返ってこなかった。ここははずれかな、と思いつつも、ウルはドアノブをまわし、扉を開けた。そのままつかつかと部屋の中に入ると、天蓋付きの豪奢なベッドの上に、人影があるのが目に入った。近寄ってみると、そこに寝ているのはアナスタシアだった。

「おい、アナスタシア、こんなところで寝てて何やってるんだ?」

そういいながら、ウルは彼女の身体をゆすった。彼女は、むくりとおきると、彼の手をピシッと叩いて言い放った。

「私が誰だか判ってるの?ロシア皇女よ。貴方みたいな馬の骨が気安く触らないで」

「お・・・おい・・・アナスタシア・・・何言ってるんだ?」

いつもと違い、人を見下した視線で高飛車な台詞をはくアナスタシアにウルは思わずきょとんとした視線を彼女に向けた。その行為

自体が、彼女の癇に障ったようで、彼女は手許にあった鐘を鳴らして衛兵たちを呼ぶと、ウルを処分するように言い放った。
「ちょ、ちょっとまてよ・・・お前・・・仲間に対して何考えて・・・」
ウルは衛兵たちが自分の周りを取り囲む、という状態に思わずアナスタシアに文句を言った。しかし彼女は、平然としたまま、ベッドに座ったまま足を組み替え、女王張りの台詞で言った。
「私のような身分の高いものが何故、お前のようなものの仲間にならないといけないの?冗談じゃないわ」
「冗談じゃないのはこっちのほうだ!いきなり襲われる筋合いなぞないわ!」
そういいながら、ウルは取り囲む衛兵たちを蹴散らし、彼女の部屋を飛び出した。衛兵たちの侵入者を排除せよ、という叫び声と共に新たに増える人数から繰り出される攻撃をかわしながらウルは宮殿内を疾走した。
「・・本当にこの悪魔は何処で高笑いをしているんだ・・・?」
ウルは息を弾ませながら目に付いた部屋に飛び込んだ。そこは、ロシア皇帝の謁見の間であり、一段高くなった場所の後ろには、ロシア皇帝とその家族の肖像画が飾ってあった。
そのとき、彼の耳に不意に何処からともなく声が聞こえてきた。
ーーーー普通の人間とは違う、選ばれた人間という考えがあるんだろう?なら、その特権を存分に振るえばいいではないか・・・選ばれてない人間なぞ、どうでもいいのだろう・・・?
その言葉を聞いた途端、ウルの表情に怒りが混じった。その時、扉が開いて、アナスタシアが現れた。彼女は、ゆっくりとウルの前を通過すると、一段上がり、見下した視線のまま彼に言った。
「どう?私は生まれながらの王家の血筋を持っているのよ・・・貴方のような庶民とは命の大きさも、価値もぜんぜん違うわ・・・ロマノフ家は選ばれた人種なのよ」
そういって、彼女は自分の背後にある肖像画を見ると、そこに書か

れている家族をいとおしげに見つめた。その視線につられるようにウルもその絵を見つめた。彼の目には、そこに描かれている家族の表情が、皆して人を見下しているように感じた。普通の人間とは違う、というおかげで散々苦労した過去が彼の頭をよぎり、思わず、肖像画に対してウルの八つ当たりに近い怒りが爆発した。

「何で俺がこんな目にあわなければならないんだ！何が普通の人間と違う、特別だ、だ！そんな言葉、俺は一番大嫌いだ！」

そういいながら彼は肖像画めがけて走りより、アナスタシアの制止の声よりも先に肖像画を叩き落とし、そのままの勢いで蹴り割った。その瞬間、彼の足元に穴が開き、そのまま落体の法則にしたがってウルは底なし沼のようにまったく見えない闇のような下へ落ちていった。

「・・・いってぇ・・・」

ウルはお尻をさすりながら立ち上がった。そこは、また、石畳の部屋だった。彼はぐるりと辺りを見回すと、ため息と共に言った。

「どうやら・・・各階層の悪魔を退けると、自動的にこの部屋に飛ばされるみたいだな・・・」

その時、きゃあああっ、という悲鳴と共に、上からウルの頭めがけて何かが降ってきた。あわてて見上げた彼の視線には、スカートを押さえたまま落ちてくるアナスタシアが目に入った。

「うわあああっ・・・」

ウルはあわてて場所をずらすと、落ちてくるアナスタシアを抱きとめた。しかし、彼女の落ちてきた勢いと、ちゃんと抱きとめる体勢を取りきれなかった、ということもあって、ウルは彼女を抱いたまま再びしりもちをつく羽目になった。

「あいっ・・・たあ・・・」

「いっ・・・てえっ・・・」

アナスタシアはうめきながらひょいと自分を抱えてくれている存在を見た。そこには、再び尻をしこたま打って顔をしかめているウルの顔が目に入った。

「ウル、何であんたこんなところに？」
「それはこっちの台詞だ、っつーの・・・何でお前、あんなところから落ちて来るんだよ」
アナスタシアの質問にウルは思わず突っ込みを入れた。アナスタシアはしばらく考え込んでいたが、身体をひょいと起こして立ち上がると、周りをきょろきょろと見回していった。
「あら・・・？私、ホームシックにでもかかったのかしら・・・ロシアのロマノフ宮殿にいた、と思ってたんだけど・・・」
彼女の言葉に、ウルは、再度打った尻をさすりながらため息混じりに言った。
「・・・さっきまでここはロマノフ宮殿だったさ・・・アナスタシア、散々俺に暴言吐いてくれていたしな・・・自分は選ばれた人種だ、俺たちみたいな庶民とは違うんだ、って」
「うそ・・・私、そんなこと言った覚えは・・・」
思わずウルの言葉を否定しようとしたアナスタシアだったが、不意に言葉をとめると、しばらく考え込むようにあごに手を置いていた。
「・・・なんかおぼろげに思い出してきたわ・・・私の頭の中で城の人間が代わる代わる言うの・・・姫様は特別なんだからそれ相応の振る舞いと態度をお示しなさい、って・・・私は特別じゃないし、そんな言葉大嫌い、って言いたくても金縛りにあったように言えなくて・・・それどころか自分まで特別だ、って思いがだんだん強くなってあがけなくて・・・」
ウルはそれを聞いて、彼女の頭を慰めるようにがしがしとわざと荒っぽくなでた。やめなさいよ、とむくれながら抗議するアナスタシアの表情を見ながら、ウルは彼女を安心させるようににこっと笑っていった。
「アナスタシアの考えも俺と気が合うようでよかったぜ・・・俺も特別、なんて言葉大嫌いだ」
その笑みの奥に影か感じられたのを見て、アナスタシアは一瞬息

を呑んだ。しかし、ウルがその点を突っ込まれるのを本能的に嫌っている、と直感で感じた彼女は、ウルの横っ腹を自分のひじでつつきながら言った。

「あなたのその態度には本当に感謝してるわよ・・・さて、ここはいったい何処で、どうやったら脱出できるか、知ってる?」

彼女の言葉に、ウルは当惑の表情と共に言った。

「うーん・・・それ言われるとなあ・・・どうやら、ここは俺が教会で見ていた煉獄の世界らしい、ってのと、この階層にある鍵を見つけたら別の階層にいける、ってだけしかわからねえしなあ・・・」

「煉獄・・・?それって、七つの大罪の悪魔が住んでいて彼らの試練をくぐり抜ければ罪が浄化される、って言うやつ?」

アナスタシアの質問に、ウルはそうらしい、とだけ答えた。彼女はしばらく考え込んでいたが、この部屋を出る手がかりを探そうと、ウルに矢継ぎ早に質問した。

「ウルがそういうこと知っている、ってことは、ここが最初の階層ではない、ってことね」

肯定の意味で縦に頷くウルを見て、彼女は頭の中で考えをまとめながら再び口を開いた。

「ってことは、他の仲間たちと出会った、ってことは?」

「ブランカと爺さんには出会った。でも、なんか、自分の中で何かを納得したら消えてしまったんだよな・・・二人とも・・・」

先ほど出会った二人の状況を思い出しながらウルはそう答えた。その言葉を聞いたアナスタシアは、ふと思い出したように言った。

「・・・多分、私の頭の中で響いていた声の主は七つの大罪のうちの『傲慢』のような気がするの・・・だって、自分は特別だ、なんて思い上がりも甚だしいじゃない?」

その言葉に、ウルは同意するように思いっきり縦に頷いた。自分は普通の人とは違い、フュージョンという特殊能力を持っている、その能力があるから自分は強いんだ、と思うこと自体、思い上がりそのものではないだろうか・・・そんな彼の回想を破るようにアナ

スタシアの言葉が綴られた。
「でも、私がその悪魔に魅入られている、ってこと自体、自分は皇女で特別な存在だ、って思い上がりがある、ってことなのよね・・・そんなのでは絶対駄目なんだけどね・・・」
そういって、舌をぺろりと出したアナスタシアの身体が不意に掻き消え、彼女のいた後には錫の鍵が残されていた。
「あ、おい、アナスタシア」
ウルの呼びかけに対して誰も応える者は無かった。彼女も納得したからこそ、現世に戻り、鍵が残された、という事実にウルは再び深いため息をついた。
「鍵を手に入れるためには相手が納得しないと駄目、か・・・後残っている悪魔の罪、ってなんなんだ?」
その知識があるであろうアナスタシアに彼女が消える前にちゃんと聞けばよかったかな、とウルは思いながら目の前にある鍵を拾うと、それをまた、ウエストポーチに入れ、行く手を阻む扉を開けた。

The Envy

ウルの目の前には、先ほどのロマノフ宮殿とは違うが、また品のいい、高級感あふれる調度品が飾ってある廊下とそれに続く部屋の扉が広がっていた。彼は、何が出てくるのか、と警戒しながら先に進んでいき、ゆっくりと扉を押し開けた。そこには、広間といえるほどの大きなフロアと、まるでそこの主だ、といわんばかりに、やわらかい青い光を放つ宝石を持った女性の像が中央においてあった。

「・・・これは・・・」

ウルは、青い光に誘われるように、女性の像に近づいた。そんな彼の視線に、不意に燃える炎のような赤い色が入った。

「・・・ウル・・・」

低い声と共に、深紅の髪をなびかせながらカレンが女性の像の後ろから現れた。彼女はゆっくりと自分の愛用の刀を引き抜くと、ウルに切っ先を向けていった。

「貴方にこの宝石は取らせないわ・・・」

「お、おい、カレン、何言って・・・」

ウルは、彼女が言い出した話の流れについていくことが出来ず、当惑の表情を浮かべた。そんな彼の態度が気に入らないのか、カレンは愛用の刀をウルめがけて振るいながら言った。

「貴方はこの石を使って最愛の女性を生き返らせるつもりなのでしょ・・・でも・・・私がそんなことさせない！」

カレンの刀の振りは鋭く、刀の切っ先と風圧がウルの身体に細かい傷を刻んでいった。ウルはカレンの刀をよけながら、一旦彼女の間合いからはずれるように思いっきり後方に下がり、この場所が何処だかを思い出そうとした。

「・・・あ・・・」

彼の脳裏に、フラッシュバックのようにロジャー・ベーコンとの会話が蘇った。石村邸で後味の悪い思いをし、これからどうしたら

いいのかわからない、何処にこのもやもやとした感情を持っていけばいいのか、という思いからお気に入りの風の谷で一人ふさぎこむように座り込んでいたところに、ロジャーがひょこひょこと現れ、彼の横に座った。

そして、彼は思いがけないことを言ったのだった・・・エミグレの秘術を使って亡くなったアリスを蘇らせる気はないか、と・・・

青天の霹靂、ともいえる申し出に、イエスともノーとも言えず、そのまま彼の真意を読み取ろうといわんばかりにじっと見つめていたウルの視線に気がついているのかいないのか、ロジャーは、エミグレの秘術を使うために必要なものとして、エリザベス女王が住んでいた宮殿の奥に守り神のように安置してある月晶石をあげた。過去にロンドンで死んだ母親を復活させようとしたジャックが手がけた方法とはぜんぜん違うことを言ってくるロジャーの言葉と、彼がエミグレの写本を書いた当の本人だ、ということに、アリスを生き返らせることが可能だ、という淡い希望をウルは思わず抱いてしまった。そのため、月晶石を取りに行くか、と尋ねられたときに、気が付いたときには首を縦に振って同意の意思を示していた・・・

「そっか・・・ここは女王の宮殿・・・ってことは、あの青い宝石は月晶石、ってわけか・・・」

なら、何故、カレンが妨害する必要があるのか、と抱いた質問に回答するように、カレンが剣を構えなおし、ウルに駆け寄りながら叫んだ。

「どうして貴方は亡くなった人に囚われているの！生者の私の思いに気が付いてよ！」

彼女の血を吐くような叫びにウルの動きが鈍った。その瞬間、カレンの剣がよけ損ねたウルの左腕に深々と突き刺さった。そのまま体重を乗せるように身体を預けるカレンにのしかかられるようにウルの身体は床に押し倒され、剣の切っ先は床に突き刺さった。

「ぐっ・・・ああっ・・・」

苦痛の声を上げるウルの刺された左腕から血の池が徐々に大きく

広がりだした。カレンは自分の左ひざでウルの右腕に乗って押さえつけると、剣を握り締めたまま口を開いた。

「私のほうが、貴方の為にずっと尽くしているじゃない・・・私のほうが貴方をずっと愛している・・・それに私は生きているわ・・・私はあの人とは違って貴方の子孫を残すことも可能なのよ！」

そう言い切るカレンの目には涙が光っていた。ウルはその言葉に沈黙しか返せなかった。カレンの自分に寄せる好意を判っていながら結局は気付かない振りでずっとごまかしていた自分を知っていたから・・・

「あの女よりも私のほうがずっといいに決まっているわ！貴方はあの女を美化しているだけ！」

それだけに、カレンの言葉はウルの心を深く抉り取るナイフのようにきついものだった。今まで信頼してやってきた仲間の口から自分の最愛の人を罵倒する言葉はウルにとって絶対聞きたくないものだった。それを聞いた途端、仲間である相手を嫌ってしまう、というより激高したまま排除してしまおう、といわんばかりの激しい感情が自分の奥底に潜んでいるのを判っていたからだった。

「それ以上言うなっ！」

ウルは渾身の力を込めてカレンを払いのけ立ち上がると、左腕に突き刺さったままの剣を引き抜いて遠方に投げ捨てた。そんな彼をあざ笑うかのように何処からともなく声が彼の頭に響いた。

――――嫉妬の感情は本音をさらけ出す・・・無理して言い訳で本心を隠すなどというおろかなことをせず、遠慮なくさらけ出せばいいではないか・・・

「冗談じゃねえぞ・・・何が本音、だ！手前に操られているカレンの言葉が本音な訳ないだろうが！」

未だ流れ落ちる血の感覚に顔をしかめたままウルはこの部屋の中を見回した。カレンに関係するもので・・・自分たちをあざ笑うかのように高みの見物をしている悪魔はどれに姿を変えているのか・・・その時、彼の目に鮮やかに輝きを示す月晶石が目に入った。なん

となく、先ほどよりも石の輝きが増したような気がして妙に彼の気に障った。

「この世界は・・・悪魔が作り出した幻影だ・・・だから・・・俺の過去の体験で、それぞれの仲間に関係した場所が現れている、のなら・・・」

彼の視線の端には、自分が投げ捨てた剣を拾うカレンの姿が映った。彼女が自分に再び向かう前に、ウルは、女性の像に飛び掛り、月晶石を叩き落した。大理石の石畳に叩きつけられた月晶石はピシッ、という音と共に粉々に割れた。その瞬間、今までいた風景が砂のようにさらさらと崩れ落ち、そこには再び石畳の建物が現れた。

「ビンゴ、だったな・・・あの石は・・・カレン自ら俺に手渡してくれた、というのを気づけてよかった・・・」

ウルは、そうつぶやきながらそのまま石畳に座り込んだ。風景は幻影でも、カレンが自分につけた傷は現実のものであり、未だに止まらない血が彼の左腕を伝い続けていた。

「う・・・ううん・・・」

ウルの目の前で倒れていたカレンがかすかなうめき声と共にゆっくりと起き上がった。彼女の視界に左腕を押さえたまま青い顔をしているウルが飛び込んできた。

「ウル、どうしたの?」

あわてて駆け寄ろうとしたカレンは、自分の右手に血の付いた刀が握られているのに気が付いた。

「まさか・・・私が・・・」

カレンはあわてて刀を払い落とすと、ウルに駆け寄り、彼の手をどかせると、服を裂き、手持ちの薬草を傷にあて、その上から包帯を巻きだした。されるがままになっていたウルだったが、不意に自分の腕に冷たいものが当たるのを感じ、そちらを見た。そこには、包帯を腕に巻きつける途中のまま止まった状態のカレンの姿があった。

「ど、どうしたんだよ、カレン?」

女性が泣いている、という状態にウルは動揺したように声を上げた。しばらくの沈黙の後、カレンは再び包帯を巻く作業を再開しながら蚊の鳴くような声で言った。

「・・・ごめんなさい・・・私が・・・貴方にこんな傷を負わせたのね・・・」

「カレンのせい、じゃないって・・・気にするなよ・・・」

ウルの慰めの言葉にも、カレンは首を振るだけだった。包帯を巻き終えた彼女は、彼から身体を離すと、再び言葉を綴った。

「私・・・貴方に傷を負わせただけではなく、暴言まで吐いていたわ・・・本当になんてお詫びしたら・・・」

そういいながら、カレンは自分の剣を手に持った。そのまま自分に向かって振り下ろそうとするのを見たウルはあわてて彼女に飛び掛り、剣を弾き飛ばした。

「何をするんだ！」

「私は・・・貴方の身体と心、両方傷つけたのよ。貴方の大切な人をあんな女呼ばわりした上に罵倒して・・・」

「違う！あれは・・・この階にいる悪魔がカレンに言わせただけだ・・・カレンにそんな言葉を言わせる原因は俺にあるんだから・・・こんなことはやめてくれ・・・」

最後のほうは蚊の鳴くような声になりながらもウルは未だ涙を流しているカレンに言った。カレンは彼の言葉に首を振りながらも、彼の真紅の目を見つめた。

「いいえ・・・あの嫉妬にまみれた言葉は紛れもなく私の本音だわ・・・もともと、貴方の心の中には大事な人がいる、ってわかっているのに私が勝手に横恋慕しただけなんですもの・・・私がこんなひどい女なんて判ったのに・・・なんで貴方はこんなに優しい声をかけるの・・・」

彼女の言葉は最後は嗚咽となった。泣き続けるカレンにウルはかける言葉が思いつかず彼女の肩に手を置いたまま沈黙していた。しばらく泣いていたカレンだったが、涙をぬぐうと、赤くはれた目で

ウルを見つめ、泣き笑いの表情で言った。
「本当はね・・・私の気持ちをここまで貴方には言う気なかったのよ・・・この旅が終わって貴方と別れる最後に、貴方のことを思っていた女がいたことを記憶にとどめて欲しい、とだけさらりと言おうと思ってたのにね・・・なくすものはなくなっちゃった、って感じよ・・・」
そういうと、彼女の身体がふっとその場から掻き消えた。そこに残された銀の鍵をウルは手にすると、彼女の涙のようにも見える銀に光る鍵に向かっていった。
「カレン・・・ごめん・・・そんな感情抱かせた俺こそ、一番醜い生き物だよな・・・」
ウルはそうつぶやいて立ち上がると、銀の鍵をウエストポーチに入れ、前に見えていろ扉に手をかけた。

The Gluttony

扉を開けた先には、そこの主、といわんばかりにでん、とリングが立っていた。それを見た瞬間、ウルの顔が引きつり、思わず、そのまま扉を閉めようとした。しかし、その扉自体が彼の手から消滅し、退路が立たれてしまった。

「おいおい・・・そりゃないだろうが・・・」

思わずウルは消えた扉のノブを持ったままの格好をした手に向かって突っ込んだ。そして、彼は再び大きなため息と共に公園の真ん中を占拠しているリングを見つめた。すると、そのリングはいきなりごごごご・・・という轟音と共に天高く聳え立った。その光景を見たウルは、これまでにない盛大なため息と共にぼやいた。

「俺・・・こいつだけはパスしたいな・・・頼むから別のやつにしてくれねえかな・・・」

しかし、そう言ったから、といってその状態は打破できるわけではなく、結局、このリングをクリアしないことには次に進めない、という現実があるということに、ウルはため息しか出なかった。彼は、頭を押さえながらも、ゆっくりとリングロープをまたいだ。

彼の目の前には、予想通り、カレーを頭に載せ、ふんどし一丁の男たちが気持ち悪い踊りを踊りながら襲い掛かってきた。ウルは足蹴りを中心にぶちかましながらリングを一気に駆け上がった。

９９階まで来たところで、ウルはリングロープにもたれかかりながら荒い息を整えていた。

「さすがにここまで一気に来ると・・・精神的ダメージもあいまって結構こたえるな・・・あのカレー男たちは精神的プラグラだ・・・」

そういいながら、彼は視線を上のリングに向けた。そこが最上階であり、それ以上のリングが見えない、ということを確認すると、ウルは、自分に気合を入れなおすように愛用のクローをもう一度し

っかりと握りなおした。
「最上階にヨアヒムがいるのは確定だろうけどな・・・だめだ・・・以前ここで無理やり見せられた気持ち悪いもの思い出したら吐き気してきた・・・」
ウルは思わずその場にうずくまった。この塔はヨアヒムが自分の師匠であるガマに立ち向かい、試練を受け、最強の称号を手に入れるために挑戦した場所でもあるが、最後の最後、ガマに勝利したヨアヒムに対して、ガマが男の筋を通す、といって迫り寄った場所でもあった。無理やり巻き込まれる状態でつれてこられたウルの目の前でヨアヒムとガマの濃厚な絡みを見せ付けられたことが彼のトラウマとなっていた。しかし、ここにずっとそのまま、というわけにもいかず、ウルは覚悟を決めたようにロープを持つと、最上階に上った。
「ウル、遅かっただっちな・・・」
そこには予想通り、ヨアヒムが仁王立ちになってウルの目の前に立ちはだかっていた。
「ヨアヒム・・・悪いことといわねえからさっさと成仏してくれ」
そういいながらウルはヨアヒムに飛び掛ろうとした。しかし、彼の身体は意に反して動かなかった。ヨアヒムは、指を一本立てて横に振ると、彼に言った。
「だめだっち、スポーツマンたるもの、ちゃんとルールにのっとらないと駄目だっち。ゴングが鳴ってから戦うのが決まり、だっち」
「じゃあ、さっさと鳴らして終わらせてくれよ」
早くこの場から逃げたしたくてそう要求するウルに対して、ヨアヒムは首を振って彼の言葉を拒否した。
「駄目だっち。ちゃんとウルにはこの塔の説明聞いて欲しいだっち」
いらねえよ、とぼやくウルの言葉を無視して、ヨアヒムは腰に手を当て、演説ぶった。
「ここは最強の男、という称号と、この、はてな?のマスクをかけて戦う場所だっち。当然負けたものには男の筋を通すだっち」

そういって、はてな?、のマークがついたきらびやかな仮面をヨアヒムは手に高く掲げてウルに見せびらかした。
「仮面も男の筋を通すのもどっちもいらねえよ・・・」
げんなりとした表情のウルにまったく気が付いていないのか、ヨアヒムは仮面をつけ、指を鳴らした。その瞬間、カーン、という音と共にゴングが鳴り響いた。
「ウル、試合開始だっち!」
そういうと、ヨアヒムはウルに飛びけりを仕掛けた。ウルは最小限の動きでそれをかわすと、カウンター気味に右ストレートを叩き込んだ。それがヨアヒムの身体にヒットし、彼はロープまで吹っ飛んだ。そのままロープの弾力を利用したヨアヒムはウルの包帯が巻かれた左腕めがけてパンチを繰り出した。
「痛ぅっ・・・」
直撃は避けたものの、ヨアヒムの力を乗せた拳圧にかすっただけでも、先ほどの層でカレンにつけられた傷に響き、ウルは思わずその場に足をついた。雑魚といっても過言ではないくらい弱いカレー男相手だと、傷をかばいつつも足蹴りで一撃ノックアウトが出来ていたのだが、さすがにヨアヒム相手ではそうは甘くいかなかった。
「こんの・・・馬鹿力めっ!」
そういいながら、ウルは自分に駆け寄ってくるヨアヒムに対して、姿勢を低くしたまま足を払った。ウルの足に見事に引っかかったヨアヒムはそのまま地面につんのめった。ウルは立ち上がると、そのまま床に転がっているヨアヒムめがけて蹴りを入れた。しかし、ヨアヒムはその攻撃を予想していたかのように横に転がると、そのままウルの左めがけて、自分の右手を軸にして両足で蹴り上げた。ウルはあわててその攻撃をかわし、後ろに飛びのくと、ヨアヒム相手に叫んだ。
「この卑怯者!人の左ばっかり狙うなよ!」
「そういうわけにはいかないだっち・・・ウルの強さは十分わかっているだらから、ウイークポイントを狙うのは鉄則だっち!」

そういうと、ヨアヒムは傍らにおいてあった魔建ビルディングを振り回した。中の小人達が振り回されることによって上下左右にシェイクされ絶叫しているのがウルの耳に飛び込んだ。その声がまるで呪詛のように聞こえ、ウルの動きが一瞬鈍った。そこを狙い打つように、ヨアヒムの一撃がウルの傷ついた左腕にヒットした。

「ぐっ・・・」

左腕に激痛が走り、ウルは苦悩の声を上げ、左腕を押さえたまま膝をついた。彼の左腕から再びつーっと鮮血が伝いだした。

その血を見た瞬間、ヨアヒムの目の色が変わった。彼はごくり、と生唾を飲むと、そのままウルをマットに押し倒した。

「なっ・・・離せ！ヨアヒム！」

組み敷かれた状態となっているウルは罵倒と共に暴れてヨアヒムの身体をどかそうとした。しかし、上から自分よりもはるかに重い体重をかけられているため、相手はぴくりとも動かなかった。ヨアヒムは舌なめずりをすると、とがった牙を誇示するようにウルに見せ付けていった。

「ウルの血の匂いはすごく甘美な香りがするだっち・・・その血を心いくまで喰らい尽くしたいだっち・・・」

「お、おい、待てっ！馬鹿ヨアヒム、やめろっ！」

ウルの声なぞまったく耳に入ってない様子のヨアヒムは彼の服をはだけ、首筋を露出させると、そこに勢いよく噛み付いた。

「ぐあああああっ！」

首筋に走る激痛にウルは悲鳴を上げた。グビグビ、と音を立て自分の血を飲み干しているヨアヒムを払いのけようと思っても、身体が鉛のように重かった。そのままブラックアウトしそうになるウルの意識を現実に引き戻したのは、ヨアヒムのとんでもない言葉だった。

「この塔の勝者は敗者に筋を通すことが出来るだっち・・・ということで、俺はウルを美味しくいただくだっち」

「ちょ・・ちょっと待てっ・・・やめろっ！」

ヨアヒムは未だにウルの首筋から伝い落ちる血を舌で舐めながら、彼のズボンのベルトに手をかけた。カチャカチャという金属音がウルの耳に飛び込んでくることに、彼は貞操の危機を嫌というほど感じさせられていた。頭の中では抵抗してヨアヒムを払いのけなければ、と思っていても、身体のほうが地面に縫いつけられたように殆ど動かなかった。鼻歌混じりにウルのベルトを一つ、二つとはずしていくヨアヒムとは別に何処からか声が聞こえた。

――――欲しいのならすべて喰らい尽くせ・・・これは人間の一番基本的な欲だ・・・基本的な欲を満足させることは当然の摂理だ・・・

「じょ・・・冗談じゃねえぞ・・・何が悲しくて俺がヨアヒムに喰われないといけないんだっ！」

思わずそう叫んだウルの視界にはてな？のマスクが目に入った。たしか・・・はてな？のマスクが外れたとき、ヨアヒムは金ぴか蝙蝠に変化しなかったか・・・

「なんて、こう、ウルの身体は美味しそうだっちか・・・何処から手をつけようか・・・」

ヨアヒムの言葉がウルを回想から引き戻した。ヨアヒムは自分の上にまたがり、口についた血を舌で舐めながら、ウルの身体を検分するように視線を動かした。ヨアヒムによって上をはだけられ、下もベルトとチャックをはずされ、そのまま下にずり下げられ、肌をさらしている、という状態はどう考えても、ヨアヒムに視姦されている、としかいえなかった。そのことに気がついたウルの顔が恥ずかしさで紅潮した。それを見たヨアヒムは再び生唾を飲み込んだ。その音が耳に入った瞬間、ウルはこのままいくと、自分がヨアヒムによって本当に筋を通されてしまう、という一刻の猶予も許されていないことを実感した。その途端ウルの覚悟は決まった。

「・・・当たって砕けろだ・・・このままなにもせずヨアヒムに喰われるくらいなら・・・」

ヨアヒムの手がウルの胸の突起に滑らされ、彼の視線がそこにい

った瞬間、ウルの右手が振り上げられ、ヨアヒムの仮面を叩き落とした。その瞬間、ボン、という音と共にウルを押さえつけている重量が消え去り、彼の目の前には金ぴか蝙蝠が金粉を撒き散らしながら、ひどいだっち、何するだっち、と文句を言い散らしていた。ウルは力の入らない身体を引きずるように仮面のところまで移動させると、妨害しようとする金ぴか蝙蝠をクローを持ったままの手で振り払い、返し手で仮面を勢いよく突き刺した。パシッ、という仮面が壊れる音を聞くまでがウルの気力、体力の限界だった。彼の意識はそのままブラックアウトした。

「う・・・」

自分の身体に感じる冷たさに、ウルの意識が浮上した。床面の硬さが先ほどのマットとは違う、ということに、彼は気がついたがそれに身体が反応してこなかった。

「ウル、ひどいだっち、人でなしだっち！せっかくいいところだったのに！」

パタパタという羽音と共にヨアヒムが彼の上でぎゃんぎゃん叫んでいる声がウルの耳に入った。うるせえ、誰が人でなしだ、と起き上がって突っ込もうとしたウルの気勢をそぐようなヨアヒムの叫び声が再び上がった。

「ここは何処だっち！なんで青空リングから石畳の部屋に変わっているだっちか！」

その言葉に、ようやくウルは目を開け、身体をわずかに起こして辺りを見回した。その場所が見慣れた場所だ、とわかった彼は、安堵のため息と共にゆっくりと身体を起こした。

「どうやら・・・この階層も何とかなったようだな・・・」

「ウ、ウル・・・誘っているだっちか？」

ヨアヒムが生唾と共に言った言葉に、ウルはいったい何のことを言っているのか、といまいち把握できなかった。しかし、ヨアヒムの視線が自分の身体に注がれていると気がついたウルはその視線につられるように自分の身体を見た。

「〇×△×※～～～！」

ライダースーツの留め金がはすれ、ベルトもはずされ、ズボンのチャックも緩められてそのまま下にずり下げられた格好のまま身体を起こしてヨアヒムに見せびらかしている、という状態に気がついたウルは言語をなさない叫び声と共に、あわててズボンをはき直し、ベルトをしっかりと止めた。もったいない、とわめくヨアヒムを殺気をたっぷり込めた横目でにらみつけながらライダースーツの留め金を止めたウルは、彼の横で相変わらず金粉を撒き散らしているヨアヒムに手を出していった。

「さっさと成仏して鍵よこせ」

「な、なに言ってるだっちか？鍵、って何の話だっち？」

まったく判ってないヨアヒムは金粉を撒き散らしながら飛び回り、彼に抗議した。ウルは立ち上がると、つかつかとヨアヒムに近寄り、そのまま拳を下に振り落とした。ベチャ、という音と共に下に落ちたヨアヒムは羽をはばたかせながらウルの目の前に行き苦情を申し立てた。

「いきなり何するだっち・・・暴力反対だっち！」

「・・・人の血吸いやがってその上、裸に剥こうとした奴にそういうことを言う権利は無いわ！」

据わりきった目のままそう言い放ったウルの表情は真剣に怒りが浮かんでいた。その言葉に、ヨアヒムの表情が凍りついた。

「あ・・・やっぱり、あれは夢じゃなかっただっちか・・・俺の頭の中で誰かが欲しければ全部喰ってしまえ、って言い続けていただっち・・・」

「夢じゃねえんだよ・・・手前のおかげで血は吸われるし、貞操の危機にはなるし・・・この落とし前どう取ってくれるんだ！」

苦情をまくし立てるウルの真紅の目は怒りにいつもよりも鮮やかさを増していた。ヨアヒムはウルの怒りのオーラにあわてて身をすくめたが、普段のウルなら絶対聞こえるはずの、殴りつける前の威嚇の意味もある指の関節を鳴らす音が聞こえないことに彼はひょい

とウルを見た。彼の左手はだらりと垂れ下がったままだった。
「ウル、その左腕どうしただっちか？」
ヨアヒムのぼけた発言はウルの怒りに油を注いだ状態となった。ウルは怒りのオーラを全身に纏いながら一歩足を踏み出していった。
「これもてめえのせいだ！」
これ以上発言したら自分の命が本気でない、と感覚でわかったヨアヒムは、あわててウルにメディリファインを渡すと、あわてて部屋の端まで飛んで懇願した。
「頼むから、俺のへそくりで勘弁して欲しいだっち・・・もう二度とウルを喰おうなんて大それたこと思わないだっちから勘弁して許して欲しいだっち」
その瞬間、ヨアヒムの姿がその場から掻き消え、彼が飛んでいた場所には、銀色の液体が入った鍵型のガラス細工が落ちていた。ウルはメディリファインを飲み干すと、彼の目の前に光るガラス細工を拾い上げた。
「なんだ・・・この銀色の液体は・・・？水銀、かな・・・？」
そういいながらウルはそれもまたウエストポーチの中にしまった。しばらくその場でじっとしていると、メディリファインの効果が現れてきたようで、首筋と左腕の痛みが和らぎ、血が止まったようだった。ウルは安堵のため息をつくと、気合を入れなおし、目の前にある扉を開いた。

The Lust

彼の目の前には、香のにおいを立ち込めた薄暗いフロアが目に入った。エスニック風柄の布が部屋に飾ってあり、奥に続く通路は、両開きのカーテンで仕切ってあった。大理石の床の上には装飾を施したソファが複数、真ん中を囲うように壁際に並べてあった。

「ここは・・・ひょっとしてカルラ婆さんの住居・・・かな・・・？ルチアが踊って占いやってくれる・・・」

そういいながらも、ウルは無意識にソファに座り込み、そのまま横になった。

「左腕の怪我とヨアヒムの馬鹿のおかげで貧血でもおこしたかな・・・それとも・・・この香が眠たくなる元なのかな・・・」

まどろんだ目のままウルはぼんやりと部屋の奥を見つめた。その時、不意にシャッ、というカーテンが開く音と共に、ルチアが愛用のタロットカードを手に現れた。彼女は半分ボーっとしたまま見つめてくるウルに向かってにっこりと微笑むと、カードをゆっくりと切りながら言った。

「これからぁ～私がウルの運命を占ってさしあげまぁ～す」

そういうと、ルチアはパーッとカードを自分の頭上に投げ上げた。そして、落ちてくるカードを拾い上げるようにゆっくりと舞いだした。まるでルチアの周りを回る衛星のように彼女の踊りに合わせてくるくると回るカードをウルは魅入られたようにじっと見つめていた。その時、彼女はウルの目の前に来たカードを一枚ピン、と指ではじいた。今まで裏向いていたそのカードはウルのほうに図柄を見せた。

『運命の輪』

その時、ウルは、自分の身体に何か違和感があるのを感じた。相変わらずけだるさが抜けない、というのもあるが、自分の胎内にゆっくりと湧き上がる熱があるような気がした。

「なんか・・・体が熱くなってきたような・・・傷が・・・熱持ち出した・・・？」

そうつぶやきながらも、ウルの視線はまるで取り憑かれたようにルチアの動きを追っていた。そんな彼の視線に気が付いているのかどうか、ルチアは再び別のカードをはじいた。

『悪魔』

彼女の指の動きでウルに見せられたカードには悪魔の絵柄がかかれてあった。その瞬間、ウルの胎内で、ドクン、という鼓動と共に強い熱がこみ上げてきた。マグマのように噴出してくるという感覚をもたらす熱はウルの胎内をまるで焦がすようだった。その感覚に襲われ続けたウルは、この熱がどういう種類のものか、というのをやっと気が付くことが出来た。

「くっ・・・くそおっ・・・なんで・・・だよっ・・・」

ウルは、自分の身体を抱え込みながら必死になって熱を押さえ込もうとしていた。しかし、熱はウルの理性を焼ききろう、といわんばかりにどんどんこもりだし、彼の体中を駆け巡り、下半身にも新たな熱が集まりだした。

「じょ・・・冗談じゃねえぞ・・・」

ウルが自分の胎内で暴れまわる熱を制御しようと荒い息を吐きながら苦しんでいるのがまったく目に入っていないのか、ルチアは優雅に踊りタロットカードを舞わせていた。そして、一枚のカードを取り、後のカードを手許にすべてしまった。彼女はカツカツとミュールの音を鳴らしながらウルの目の前に立つと、優雅な笑みと共にカードの図柄をウルに見せた。

『死』

「ウルにはぁ～カードのとおり、死んでもらいまぁ～す」

「なっ・・・！」

目元が潤みきったウルの視線が見たものは、冷たい笑みを浮かべたまま自分の愛用の武器である刃を仕込んだ扇子を振り上げたルチアの姿だった。ウルはあわててソファから転げ落ちてルチアの攻撃

を回避した。すかさず立ち上がろうとしたウルだったが、彼の身体は自分の意に反してがくん、と崩れ落ちた。

「身体に・・・力が・・・なんで・・・」

もてる力を振り絞って殆ど這うようにしてルチアとの距離をとったウルだったが、自分の身体の異変に当惑するしかなかった。そんな彼の混乱を見抜いたのか、ルチアはにっこりと微笑んだまま彼に言った。

「ここの香はぁ～身体の動きを麻痺する作用もありまぁ～す。だから、ウルは動けない、って訳でぇ～す」

「・・・何が動けないってわけです、ってだ！くっそぉ・・・何とかこの香を消さないと・・・」

ウルの視線はこの香りの発生源を探してさまよった。しかし、彼の目に映る部屋の内装の何処にも香りを放つようなものは無かった。その間にも、ルチアはゆっくりと身体をくねらせながら、先ほど引いたカードを従え、ウルの目の前に立つと、彼に向かっていった。

「このカードの示すとおり、運命の輪が回るとき、悪魔は死ぬ、ってことでぇ～す。誰が死ぬかは、ドンレミの悪魔、といわれた貴方なら良くわかるはずでぇ～す」

彼女の言葉に、ウルは違和感を感じた。しかし、その思考をさえぎるように、ウルの胎内を熱が再び侵食しつつあった。熱で頬が高潮し、目は潤みきり、彼の下半身は、熱の開放を望んでズボンの中で痛いくらい張り詰めていた。今すぐ自分のモノを慰めて熱を開放したい、という誘惑が彼を揺さぶった。しかし、それを踏みとどめたのは、彼の目の前でにこやかに微笑みながら凶器を持って攻撃を仕掛けようとしているルチアと、人前でそんな恥ずかしいことが出来るか、というウルの強靭な理性だった。

「くそっ・・・ここの悪魔は・・・いったい何処に・・・」

荒い息の中、思わずつぶやいたウルの言葉に、ルチアはくすくすと笑いながら扇子の先でウルを指差しながら言った。

「悪魔なら・・・貴方のことでしょ～ぉ？何を寝ぼけて言ってるの

？」

その言葉にウルはルチアに対する違和感が更に強くなった。彼は、愛用のクローを握り締めると、ルチアに向かっていった。

「女殴るのは趣味じゃねえんだけどな・・・お前がルチアではない偽者、なら話は別だ！」

その言葉のままウルはルチアに鋭いパンチを叩きつけた。彼女の身体に当たった、と思った瞬間、ルチアの身体は霧のように四散した。

「残念でしたぁ～幻覚作用もあるんでぇ～す」

ウルの背後から聞こえた声と共に、彼の背中に鋭い痛みが走った。あわてて振り返ったウルの目には、血で塗れた扇子を持ったルチアの姿があった。彼女の周りを従うように漂っている三つのカードを見たウルの脳裏に、以前、彼女と交わした会話が不意に思い出された。

――――タロットカードは、正位置と逆さ向きの逆位置ではまったく正反対の意味を指す、だからカードの中には悪魔とか、死、というような悪い意味のカードも混じっているんだ、と。

「切られた傷の痛みのおかげで頭が多少はすっきりした、ってのは皮肉だが・・・この場所で死ぬわけにはいかないからな・・・」

ウルはそういいながら立ち上がり、壁に背を預けた。その前にカードたちがスーッとウルの前に近寄った。その中の悪魔の顔が、にやりと笑った。その悪魔の表情に見覚えがある、と思ったウルの気をそらすように、ルチアはミュールの音を立てゆっくりと歩み寄った。彼女は、血のついたままの扇子を口元に当て、優雅に微笑みながらまるで死刑宣告人のように言った。

「無駄なあがきするくらいならぁ～生き物の本能である性欲に浸ったまま死んだほうがいいんじゃなぁ～い？」

「冗談でもお断り、だ！」

ウルはそう言い切ると、ルチアの顔をキッと睨みつけた。そんなウルの表情を、まるで女王のように勝ち誇りきったルチアは、余裕

の笑みと共にそのまま見つめていた。強い抵抗の意思を示している鮮やかさを増した真紅の両目とは対照的に、彼のもたれかかっている壁は真紅に染まり、その範囲を徐々に広げつつあった。そんな彼の抵抗をあざけるような声が聞こえた。

――――無駄な抵抗なぞせず、そのまま性欲におぼれきったほうがいいだろうに・・・お前の痴態を仲間の目の前にさらけ出したまま死んでいくがいい・・・神殺しよ・・・

その言葉に、ウルの表情が一瞬険しくなった。しかし、次の瞬間には、彼の表情にあざけりをこめた笑みが浮かんだ。

「この階層の仕掛け人が判ったぜ・・・とっとと俺に倒されたのだから成仏しておけばよかったのによ・・・ラスプーチン！」

ウルの手はおもむろにルチアの前にあるタロットカードに伸ばされた。彼は両手に一枚づつカードを持ち、それを逆さにすると、手を離した。悪魔のカードと死のカードが逆位置になった瞬間、その場の空気が震えた。

――――くそ・・・この私が・・・神殺しに再び遅れを取るとは・・・

呪詛の言葉を吐きながら、悪魔のカードから黒い煙が飛び出した。そのまま黒い煙は部屋全体を覆いつくした。黒い煙は、ウルの気管支に不快感と刺すような痛みを訴えた。彼はあわててこれ以上この煙を吸い込まないように、と手で口と鼻を覆った。しかし、そんなことは一時しのぎにもならず、程なく息苦しさと傷の痛みに口と鼻を押さえたままウルの膝ががくんと砕けた。そのままずるずるとしゃがみこんだウルの身体に不意に暖かい手が置かれた。ぼんやりした視線の先には、銀色の髪を持つ彼の大切な人が立っていた。彼女は彼を安心させるように、といわんばかりの優しさと慈しみをこめた笑みを見せると、両手を広げ、ゆっくりと呪文を唱え始めた。その呪文は、まるで子守唄のように心地よく、ウルはその声に誘われるように目を閉じた。

暗い闇に沈んでいたウルは自分の頬に当たる暖かい感触にゆっく

りと目を開けた。彼の目の前には、白いニーソックスをはいた太腿と膝が見えていた。そして、彼の背中には暖かな気が当てられていた。

「気がつきましたか・・・？」

いたわりをこめた声に誘われるようにウルは視線を上げた。そこにはアリスがウルの傷ついた背中にヒーリングをかけていた。ずきずきとした痛みがすっと引いていく感触にウルの目が細められた。彼女の癒しの手は、ウルの首筋のヨアヒムに牙をつきたてられた場所に当てられ、最後には左腕へと移動した。彼女の手がウルの傷すべてを癒したとき、全身がふっと軽くなったような気がして、彼は身体を起こした。彼女のヒーリングの効果は、ウルの胎内に侵食していた熱すら収めていた。未だぼーっとしているようなウルの表情を覗き込むようにアリスの顔が動いた。最初はなにも反応が見られなかったウルだったが、ようやく自分の顔をアリスが覗き込んでいる、と気がついたウルの頬が赤く染まった。

「あ・・・ありがとう・・・」

照れくささと赤く染まった頬を見られたくなくて、思わずそっぽを向いてしまったウルを見ながらアリスは真剣な表情と口調で話しかけた。

「本来ならこんなことはしてはならないのですが・・・今回は特別に貴方の受けた傷を治療させてもらいました・・・これは私なりの一種のお詫びです」

彼女の言葉に、てっきりアリスが現れてくれたものだ、と思い込んでいたウルはいぶかしげな視線を向けた。

「・・・お前はフェイスレス、か」

ウルの質問に縦に頷くことで肯定の意思を示したフェイスレスは、彼に現在の状態を説明した。

「先ほどの階層の悪魔は・・・私の制御を離れ、本来なら仕掛けを解かれ、散らされた時にはこの始まりの間に戻すはずが、貴方が仕掛けを解いた時、有毒ガスを撒いて貴方を完全に殺そうとしてしま

っていました・・・多分・・・貴方のその能力と関係がある悪魔だったんでしょうけど・・・」

「だろうな・・・さっきの敵は前に俺が倒したことのある奴が魂の契約を結んでいた悪魔だったからな」

フェイスレスは彼の答えを聞いて、納得したように頷いた。そして、彼が次に聞いてくるであろう質問に先回りしたようなタイミングで話しを続けた。

「貴方の仲間は無事この階層から離脱して現実世界に戻しましたからご心配なきように・・・そして、貴方に、次の階層へ続く鍵をお渡しいたします」

彼女は銅製の鍵をウルに手渡した。彼はそれを受け取りながら、ふと心の中に浮かんだ疑問を口にした。

「悪魔が制御を超えた、っていうくらいなら俺をこの地点で現実世界に戻すことも可能じゃないのか?」

「いいえ・・・そこまでの能力は私にはありません。もし、仮にあったとしても、貴方をここで帰してしまえば、もう一人の仲間はここから出ることが出来ず、永久にこの場所にいる羽目になるでしょうし、貴方の魂が救済される機会も永久に失われてしまいますから」

ウルは深いため息と共に、今まで出会った仲間たちを指折り数えながら誰が最後に残っているのか、を確認した。最後に残った人物が誰か、というのがわかった瞬間、彼は深いため息と共に言った。

「しかたねえよなあ・・・気合入れて最後まで行くか・・・最後に残された悪魔も俺が良く知っている奴だろうし、これ以上事態がひどくならないと思いたいな」

そういいながら、ウルは次の階層へと続く扉に手を掛けゆっくりと中に入っていった。それを見送りながら、フェイスレスは悲しそうな目をしてつぶやいた。

「次の階層で貴方がよく知る悪魔が私の制御を超えないことを祈ります・・・そして、現実世界への扉を無事開けられることも・・・」

The Greed

扉を開けた先は、今までずっと建物が続いていたのとは一転して、うっそうとした木々の生えている森に変化していた。ウルは、あたりをきょろきょろとしながら奥へと進んでいった。

「この森、どこかで見たような気がするんだけどな・・・何処だったかな・・・」

つぶやいた言葉に呼応するように、不意に殺気と影がウルめがけて飛び掛った。彼は、反射的にそれをかかと落としの要領で蹴落とした。ガラガラ、と音を立てて床に落ちた物体を見て、ウルは思わず驚きの声を上げた。

「な・・・なんでこれが？」

彼の目の前には、からくりの三連鴨のおもちゃが転がっていた。ウルにはこのおもちゃに見覚えがあった。これは、ドンレミの村にいたとき、ドイツ軍を追い出すためにゼペットが仕掛けたものだった。それが自分に襲い掛かってくるという事実にかすかながらショックを受けたウルだったが、あわてて首を振ると気を取り直し、改めてじっくりと森の風景を見つめた。

「やっぱり・・・どう見ても、ここはドンレミの村に入る手前の森とそっくりだ・・・となると・・・」

彼にはこの層の悪魔が何処にいるか、ということが容易に想像つきそうだった。ウルはそのまま村へと歩いていくと、仕掛けられているトラップの多さに辟易しながら、ゼペットのからくり人形たちを撃破していった。

「じいさん・・・むちゃくちゃマメ、というか、楽しんでトラップ仕掛けてたんだな・・・」

深いため息と共にウルはこの村の一番奥にある教会へと向かった。しんと静まり返った教会の扉をウルはゆっくりと開けると、そのまま奥に歩いていった。その視線の先には、キリストの像の前で立っ

ている男性が映っていた。
「ここが・・・貴方にとって始まりの場所、であるのですね」
凛、とした声が教会中に響き渡った。ウルは無言のまま蔵人の前に向き合った。
「ここでヤドリギを胸に打たれ、今の旅が始まった・・・だから貴方は教会に行かれたんですね・・・自らの思いを精算する為に」
「なっ・・・」
表情を崩すことなく、淡々と話す蔵人に対して、ウルは一瞬動揺の表情を見せた。しかし，彼はそれを霧散させると，逆に強気の表情で彼に向かって言った。
「お前に・・・なんでそんなこと言われないといけないんだ?お前に何の権利がある?」
ウルのその言葉が蔵人の逆鱗に触れたようで、彼の表情は一転して暗く冷たいものとなった。蔵人はそのままつかつかとウルのそばによると、彼の肩をぎゅっと掴んでいった。
「貴方は僕のものです。誰にも渡さない、ましてや、天国にいるであろう貴方の恋人になんて、もってのほかです」
きっぱりと言い切る蔵人の背後にゆらりと影が現れた。その影はウル自身が良く知る人物だった。
「・・・アモン・・・ということは、この蔵人はお前の幻影・・・?」
疑問を口に乗せたウルだったが、それを否定したのは、大気を震わし、直接ウルの脳内に響き渡るアモンの声だった。
ーーーーそれは違うな・・・お前に対する思いが我と一致したからこそ、我は蔵人と同一、つまり、神降ろし状態となっているだけだ
「そういうことです・・・僕たちの共通した思いはただひとつ・・・貴方を独占すること、です。それも、肉体だけではなく精神も」
アモンの言葉を引き継ぐように言い切る蔵人の腕の力が強くなった。ウルは両腕の痛みに顔をしかめ、それを振り払おうとした。しかし、逆に蔵人に押し倒され、そのまま体重を掛けてのしかかられ

た。
「・・・どけよ・・・」
ウルは鮮やかな真紅の目で蔵人を睨みつけた。しかし、彼からは拒否の言葉が返ってきた。
「いや、ですね・・・この世界は一種の精神世界ですから、貴方がどんな思いを込めてこの煉獄の絵を見ていたのか、というのは、手に取るように判っています」
蔵人の言葉を聞いたウルの顔に朱がさした。自分の心の中身を覗き見された、というデリカシー無し、プライバシーの侵害、といわんばかりの蔵人の発言にウルは怒りのまま言葉を綴った。
「てめえなんかにどうこう言われる筋合いはねえ！俺はとっととこの世界からおさらばして現実に戻りたいだけだ。俺のこれから、は俺自身が決める！」
蔵人は冷たい笑みのままウルの体幹を押さえつけた。そして、アモンの影が放ったかまいたちがウルの服を粉々に切り裂いた。生まれたままの姿をさらけ出したことに、ウルの表情に恥ずかしさと怒りの朱がさした。しかし、その色よりも鮮やかな真紅の目はアモンと蔵人、両方を睨みつけたままだった。
「お前らなんかに・・・俺の心は絶対に渡さない・・・ましてやヤドリギになんてそのまま食わせてやるもんか！」
吐き捨てるように言い放ったウルの言葉に、蔵人は表情を変えることなく、ゆっくりとウルの胸板に手を滑らせながら反論した。
「ならば・・・まずは肉体から支配してしまえばいい・・・そうすれば、精神もおのずから肉体に引きずられて従うはずですから・・・貴方を独占できるなら、僕は一生ここから出られなくても全然かまわないですからね」
「・・・狂ってる・・・おかしい、何言ってるんだ、蔵人・・・」
とんでもない蔵人の発言にウルの表情はこわばった。そして、彼の目は、蔵人の背後にいるアモンに移った。そして、アモンの内心を見通そう、というようなきつい視線で彼を見据えて言った。

「アモンのせいで・・・蔵人がこんな変な発言をしているのか・・・？」

ウルの疑問にアモンの影は首を横に振った。そして、再び大気が震えた。

――――否・・・先ほども言ったであろう・・・彼の、と我のお前に対する思いは同じだ、と・・・彼が発する言葉は彼自身の思いであり、意見でもあるのだ・・・

「・・・いかに貴方が僕の表面だけ見てきていたか、というのが良くわかるでしょう・・・これは紛れもなく僕の本心ですよ」

アモンの言葉を引き継ぐように蔵人はそういうと、ウルの首筋に顔をうずめ、そこに唇を這わせた。蔵人の唾液による生暖かい感触にウルの顔がしかめられ、抵抗しようとあがいた。

「い・・・やだっ・・・俺は・・・女なんかじゃないっ・・・」

不意に、彼の頬に、空気の圧力が触れる感触がした。ウルはその感触を与えた者のほうを見上げた。アモンの影がまるでウルをなだめるように頬に手を当てていた。

――――ここにずっといればヤドリギの呪いは止まったままだ・・・お前に肉体的、精神的苦痛を与えるものから逃れられるのだぞ・・・

「そして、貴方に蓄積されるマリスは、僕たちが引き継いであげます・・・こうやって・・・」

蔵人の唇はそのままウルの胸の突起へと滑らされ、そのまま軽く歯を立てられた、

「くっ・・っ痛うっ・・・」

与えられた刺激にウルの身体がびくり、と震え、そのまま口からは引きつった声が漏れた。蔵人の唇はそのままウルの身体から快楽を引き出そうと、丹念に彼の胸の突起を刺激していた。その度にウルの胎内に熱がこもり、それが胎内を駆け巡り、理性を焼き尽くそうとしていた。彼の真紅の目は彼自身意識しないうちにだんだんと潤みだしてきていた。

「や・・・だっ・・・こんなこと・・・」
ウルは必死になって自分の中で大きくなってくる快楽への火種を消そうと頭を振った。そのしぐさに、無駄な足掻きを、と言わんばかりに今までウルの腕を押さえつけていた蔵人の右手が離され、それがウルのモノへと伸ばされた。
「嫌だっ！触るな、蔵人っ！」
ウルは今まで押さえつけていた蔵人の手が無くなった左腕を思いっきり彼めがけて振り払った。不意をつかれ、拘束が弱まった瞬間、ウルは自分の身体を蔵人から離した。中途半端に自分の胎内で燻ぶる快楽の火を押さえ込むように、彼は自分の両腕で自分の身体を強く抱きしめながら言った。
「こんなの・・・こんなのなんて嫌だ！ヤドリギの苦痛と引き換えに女のように身体を開け、と要求されるなんて・・・それならまだヤドリギの苦痛のほうが耐えられる！」
そう言い切るウルの真紅の目は真剣そのもので、彼の言葉が嘘や誇張ではなく、真実であることを伝えていた。蔵人は悲しそうな目で、ウルを見つめ、彼の真意を問いただすように言葉を発した。
「なんでなんですか・・・ヤドリギの呪いは二度と解くことが出来ないもの、なのでしょう？このままいけば、確実に貴方の心を破壊してしまうではないですか・・・」
彼の言葉を引き継ぐようにアモンも大気を震わせ、意見を述べた。
――――そして、お前なら、心が破壊されて自分が封じ込めている化け物たちが現世で暴れまわるリスクを回避しようとして、唯一の手段をとるのであろう？・・・自らの死、という、な・・・
蔵人とアモンの言葉に、ウルは寂しそうな表情で淡い笑みを浮かべるだけだった。そんな彼を見て、蔵人は思わず叫んだ。
「駄目です！貴方が自分で自分の命を終わらせる、なんて僕は絶対認めない！」
彼の言葉に、ウルはゆっくりと首を横に振った。そして、自責の念がこもった真紅の眼差しで、蔵人を見つめて口を開いた。

「・・・俺は・・・一度自らが封じ込めようとしたモンスターを封じ込められなくて・・・都市を破壊したことがあるんだ・・・意識がそのモンスターにのっとられつつあるなかで、かすかに残った俺の心の中に、なにも悪いことをしていないのに突然殺される羽目になった人々の恨みつらみがナイフのように無数に突き刺さった・・・そんなことをもう二度と引き起こしたくない・・・」

そういうと彼の目はゆっくりと閉じられた。その表情からは、彼の言葉が真実であること、そして、彼がヤドリギの呪いが完全に自分を覆いつくした時に何を恐れているのか、というのが痛いくらいに蔵人には感じられた。

「なら・・・ここにずっといれば・・・」

「それじゃ駄目なんだ・・・この檻の中で永遠にお前とアモンと居るってわけにはいかない・・・」

蔵人の言葉を遮るようにウルは静かな口調で言い、アモンを見つめた。

ーーーーお前は予想通りの回答を返すな・・・

アモンの言葉には苦笑が混じっていた。自分の思いを判って欲しい、と真剣な眼差しで見つめるウルの視線を彼は見つめながら再び口を開いた。

ーーーーしかし、我が、はいそうですか、といって聞き入れると思うのが浅はかだ・・・我は強欲、なのだぞ

それを聞いたウルは視線を床に落とすとつぶやくように言った。

「・・・俺は結局、どういう形であれ、自分の心を壊すヤドリギの呪いからは逃れられないんだな・・・」

「な、何言ってるんですか！ここに居ればヤドリギの影響は止まったままじゃないですか！なのに何故そのようなことを！」

ウルの言葉に蔵人は思わず叫んだ。ウルは自分の左胸に手を置いたまま彼の疑問に答えた。

「この場所じゃフュージョンモンスターは存在しない。しかし、俺の中には相変わらずマリスは入り込んでくる。それをどうにかする

ためには身体を開け、という繰り返しをずっと続けていくんだろう？そういうことなら、俺はただの人形と同じだ・・・それなら、俺はここにいるより、現世でやれることを精一杯するほうがいい・・・」

彼の言葉に蔵人は沈黙しか返せなかった。その時、蔵人の身体から完全にアモンの影が分離し、実体となって姿をとった。彼は、まるであやすようにウルの頭をなでながら彼に提案した。

――――相変わらず強情な奴だ・・・それでこそお前らしいんだがな・・・ならば、お前が一番危惧しているお前のフュージョンモンスターへの封印、我が何とかしてやろう。お前と血縁であるこの者の力を借りてだがな

「だ、駄目だ！俺の問題に蔵人を巻き込むわけには・・・」

「僕はかまいません。ウルさんの為なら、命を投げ出す覚悟は出来てます」

アモンの提案にあわてて蔵人の身を案じ、否定しようとしたウルの言葉を遮るように凛とした声が響いた。

「蔵人、何言ってるんだ。お前、これがどういうことか判って言ってるのか？」

「当然、です。僕は自分の目の前で貴方が命を落とすと判っていて見逃すなんて出来ません。僕の微力な力でも貴方が死を選ぶということを回避できるなら・・・」

ウルの反対を押し切るように蔵人は強い口調で自分の考えを述べた。それを聞いたアモンは納得したように頷くと、ウルの顎を取り、ゆっくりと自分の唇を重ねた。なにを、とウルが意見することを許さない、といわんばかりにアモンの口付けは深く、彼の舌はウルの唇をこじ開け、その中に縮こまっている彼の舌に絡みつき、そのままいとおしむように彼の咥内を動き回った。

「・・・んっ・・・んっ・・・」

あまりにも力強いアモンの口付けに、ウルは抵抗する力を吸い取られたようにその場に崩れ落ちた。そんな二人の様子を無言のまま

見つめる蔵人の視線に気がついたウルは恥ずかしさから赤面したまま顔を思わずアモンにうずめた。そんなウルをアモンはひょいと抱き上げると、蔵人の前に連れて行き、彼の前に立たせた。

「な・・・やっ・・・なんで・・・」

潤んだ目のまま、ウルは自分を蔵人の前に立たせた真意をただすようにアモンを見つめた。彼は、蔵人のほうを向いて、まるで言い聞かせるように口を開いた。

「ウルを媒体として、我と契約の契りを結ぶことだ・・・そうすれば、もともとお前が持つ籠目の封印と、我の力でウルの中に居るモンスターたちが彼の中から飛び出すことを抑えることが出来る」

アモンの言葉に、蔵人は判りました、とだけ言い、ウルを見つめた。一方、ウルは、いやいやをするように首を振ると、力が抜けそうになる足を叱咤しながらこの場から逃れようとした。しかし、彼の身体はアモンが拘束し、目の前にいる蔵人は手を伸ばし、彼の顎に手を掛けた。

「やめろ・・・やめるんだ、くらん・・・」

ウルの必死になったの拒否の声を封じるように蔵人は深くウルの唇に自分の唇を押し当て、そのまま舌を差し込み、ウルの咥内を味わうようにゆっくりと動かした。その瞬間、彼の中でマグマの対流の様に熱がうごめき、すべてを焼き尽くさんばかりに一気にかっと熱くなった。ウルの目がその感覚についていけず驚愕に見開かれた瞬間、糸が切れた人形のように身体からがくんと力が抜け、そのままアモンに寄りかかるように体重を預けたまま、彼の意識が無くなった。

「ウルさん、大丈夫ですか？」

蔵人はあわててウルの身体に触れ、気がついて欲しい、といわんばかりに揺さぶった。それを静止したのはアモンだった。

――――今までの疲労が一気にきただけだ・・・それに、今の我らがあまりこの場所に居続けるのはよくないこともあるのでな・・・

彼の言葉のニュアンスに何か裏がある、と察知した蔵人は、承知

したように頷いた。アモンは、ウルを床に横たえると、そのまま、彼のウエストポーチのところへと移動した。蔵人もそれについていくように彼のそばに寄った。ウルの愛用しているウエストポーチは先ほどのアモンの攻撃により、布切れの残骸と化していた。そこに光る複数の材質の違う鍵を蔵人は興味深げに拾い上げた。

「この鍵は・・・」

――――我ら七つの大罪を示す鍵、だ。そして、我を示す鍵はここにある

そういってアモンは鉛で出来た鍵を彼に手渡した。蔵人は自分の手に載せられた七つの鍵を当惑した表情のまま見つめていた。

「これをいったいどうしたら・・・」

蔵人の疑問に答えたのは、アモンではなく、彼の背後に現れた女性からだった。

「その鍵を、そこにあるキリスト像に返却してください。そうすればそれが現世への扉、となります」

「・・・あなたは・・・？」

蔵人の疑問に答えたのは、銀髪の女性ではなくアモンだった。

――――わざわざここまで足を運ぶとはご苦労なことだな、フェイスレス・・・

その言葉に彼女は何もかもお見通し、といわんばかりの淡い笑みを浮かべたままぺこりと頭を下げた。何が、いったい、どうして・・・という解けない疑問を抱えたまま蔵人は二人を見比べていた。その視線に答えたのは、フェイスレス、と呼ばれた女性のほうだった。

「ここは煉獄界です・・・天国と地獄との境目の・・・そして、この世界は、無意識とはいえ、ウル自身が望んだもの・・・貴方たちに一番関連のある罪を自分で払いのける、ということで彼なりの貴方たち仲間への感謝の気持ちがあった、というわけです」

そういいながらも、彼女はアモンに対して意味深な視線を投げかけていた。それに気がついたアモンは、ため息と共に彼女に言った。

――――我はウルを気に入っておる、そう、無茶はしておらぬわ・

・・・

「・・・貴方の言葉を信用しましょう・・・一応・・・」

まるで旧知の仲のように会話を交わすアモンとフェイスレスを見比べながら、蔵人は再び浮かんだ疑問を口にした。

「でも、貴方が悪魔であるアモンと知り合い、ということは、実際にはウルは悪魔をはらってない、ということにはなりませんか？」

「それは大丈夫です・・・私は神の使いですから私の言葉を信用してください・・・それに、悪魔はもともとは神がもつ悪しき部分を具現化したものですから、神と表裏一体のところがあります。だから、私も彼らを知ってますし、逆もそうだ、というわけです」

そういうものなのか、と自分の中で納得させようとしている蔵人に、せかすような声がかかった。

――――早く現世に戻ってやるがよい・・・石の間にウルをずっと寝かせておくのも気の毒だからな・・・

アモンの言葉に蔵人は了解した、とばかりに頷くと、キリスト像の前に七つの鍵を置いた。その瞬間、キリスト像が光り、彼らの視界を真っ白に埋め尽くした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7947w/

The Sevens Key

2011年9月29日03時14分発行